

チャイルドエデュケア研究所

年報

22号

2024

桜花学園大学・名古屋短期大学



2024年度テーマ

「共生社会を担う子どもの育ちのために」

チャイルドエデュケア研究所機構図

目 的

- 地域の関係機関・団体と連携し、教育・保育、子育て支援等の研究・事業の推進
- 教育・保育専門職の養成・研修・継続教育に関する社会的要請に応える実践・研究・事業の推進
- 大学の教育研究の成果を地域社会に還元し、大学院生・学生等へ研究と学修の機会を提供
- 教育・保育に関する理論的・実践的な課題を、インクルーシブな観点をふまえ、グローバルかつ地域的な視点から研究し、教育・保育の社会的な充実発展に寄与

研修・事業部門

- 教育・保育に関わる理論的・実践的な研究と研究会、交流会、公開講座等の開催
- 教育・保育専門職の養成・研修・継続教育に関わる研究と事業
〈夏季保育セミナー〉
 - ・卒業生支援
〈冬の講演会〉
 - ・地域へのリカレント教育
- 目的達成のために必要な事業
〈子育て支援室「さくらんぼ」の運営〉
 - ・子育て交流会
 - ・支援室開放
 - ・さくらんぼ通信の発行
 - ・子育て講座・親子講座
 - ・学生ボランティアの参加

研究部門

- 研究所年報等の刊行物の発行
- 国内外の大学、研究機関、地方公共団体、関係団体との学術交流
- 外部機関・団体との共同研究及びそれらの機関・団体からの委託研究
〈教育・保育・子育てにかかわる研究や実践報告〉

相談部門

- 発達教育相談に関わる研究と事業及び教育訓練・研修等

★3つの部門で7つの事業を地域と連携しながら運営していきます。

目次

はじめに

【武藤直子】 2

§ 1 研究・実践報告

- (1) 幼児を取り巻く人間関係の様相から探る「共生意識」の芽生えとは
—友達や保育者と関わり合うエピソードの分析から— 【上村 晶・鈴木捺津美】 3
- (2) 保育学生は「多文化共生」をどのように捉えようとしているのか
—名古屋朝鮮初級学校付属幼稚園との交流を通して— 【内田将平】 5
- (3) 保育実習におけるエピソード記録導入の意義
—保育・子どもをより深く理解するための記録のあり方—
【Dalrymple 規子・石山英明】 7
- (4) 宮沢賢治の描いた子どもたち—脱マニュアル主義の為に— 【太田昌孝】 9
- (5) 共に学び、共に生きる—多様性理解と協働力を育む実践報告— 【杉山実加】 11
- (6) 子ども食堂開催の実践報告 【吉見昌弘・八幡美保】 13

§ 2 2024年度研修報告

- (1) 夏季保育セミナー（報告） 【伊藤茂美】 15
- (2) 冬の講演会（報告） 【Dalrymple 規子】 19

§ 3 2024年度事業報告

- (1) 子育て支援室「さくらんぼ」利用者へのアンケート 【吉田真弓】 23
- (2) 大学における子育て支援室の役割 【鬼頭弥生・武藤直子】 25

2025年度事業計画、編集後記

はじめに

チャイルドエデュケア研究所は2003年に保育子育て研究所として設立、そののち時世に合わせ名称を変えて現在に至り、当大学地域連携センターの一つとして、教育・保育と子育てに関する地域との連携機関として事業運営を行っています。研究所と言っても専用の研究施設を持つのではなく、1ページの機構図のように、4つの目的を掲げ、7つの事業を行う機能を有する形態の組織であります。教育・保育実践、育児、研究、教育が交わることにより、そこに新たに生み出されるものがあります。当研究所の機能を活かし、当大学の教職員、学生、卒業生、地域の教育・保育現場の実践者、子育て家庭の親子、関係機関の方など、子どもの幸せを願う人々をつないでいくことが使命であると考えています。当研究所が「つなぐ」役割を持ち、教育・保育の関係者や子育て中の方たちと関わり、声を聞き、対話をしながら、つながっていくことで、地域の教育・保育や子育て文化が豊かに育まれるお手伝いができると考えています。よって、私たち当研究所の所員は「つなぐ」役割を持つ者であり、学生、教育・保育者、教職員など子どもに関わるすべての人がチャイルドエデュケア研究所の主体であると言えます。主体が自ら育ったり、持てる力を発揮したりすることを願い、地域のハブのような存在として、「つなぐ」役割を果たしていきたいと考えます。当年第1号のなかで、神田英雄氏は「実践と研究と大学教育の結合でひらかれる新しい可能性こそが、保育子育て研究所設置の意味である」ことと、(当研究所が)「触媒」になることへの希望について述べています。チャイルドエデュケア研究所は、子どもの幸せのために、ハブとしての構造的役割、触媒としての性質を活かして地域連携を進める研究所で在りたいと考えます。

2024年度は「共生社会を担う子どもの育ちのために」をテーマに ①研修・事業部門 ②研究部門 ③相談部門の3部門で活動を行いました。

研修・事業部門では、セミナーと講演会を開催しました。7月に実施した夏季保育セミナーでは「遊びを一緒

に楽しもう」というテーマで卒後1～2年の卒業生の教育・保育者が集まりました。卒後10年程度の先輩保育者に講師として、様々な遊びの実践を伝授していただきました。また、10月に開催した講演会では、谷島直樹先生をお招きし「心の窓を開いて、世界を広げようーニュージーランドから学んだ、大人と子どもの共生の輪と多文化理解」のお話をうかがいました。内容の詳細につきましては、本年報にてご確認ください。

研究部門に関しましては、本年報に掲載しております研究・実践報告をご覧ください。

相談部門に関しましては、大学内にあります子育て支援室「さくらんぼ」にて年齢別交流会・開放日を実施しました。親子で参加していただき、大変な日々の育児の合間のひとときを「さくらんぼ」で過ごしていただけているのではと感じています。育児は尊い営みではありますが、養育者に負担がかかるものです。子どもは愛おしく大切な存在である分だけ、心配や不安もつきまといまゝす。「さくらんぼ」は、育児のしんどさを共有できる保護者同士の交流の場として、そして、子ども・保育の専門性を持つ保育士が傍らにいて、いつでも気軽に相談できる場となっています。日常の中で起きているちょっと気になること、少し心配なことなどを気構えることなく安心して話していただけることを大切にしたいと考え、昨年度より、相談部門を強化しています。相談内容やご希望に応じて専門分野を担当する大学教員へつなぐことにも取り組んでいます。当研究所が掲げるテーマ「共生社会を担う子どもの育ちのために」まずは、私たち大人が、支え合い、安心して暮らすことが必要です。相談部門では、子育て家庭が安心して育児ができ、子どもも安心感に包まれて育つことができるよう、共生社会づくりの一端を担いたいと考えています。

今後も引き続き、子どもや子どもを取り巻く社会に生きるすべての人の幸せに寄与できるよう、皆様とつながっていききたいと思います。この年報が、つながりの一助となりますように願っています。

チャイルドエデュケア研究所 所長
武藤 直子



幼児を取り巻く人間関係の様相から探る「共生意識」の芽生えとは 友達や保育者と関わり合うエピソードの分析から

上村 晶（桜花学園大学保育学部保育学科）・鈴木捺津美（愛知文教女子短期大学幼児教育学科）
キーワード：共生意識・人間関係・エピソード分析

I 問題と目的

「共生」とは、自己と異なる他の存在と共に生きていくことを指しており、OECD（2015）のSDGs（Sustainable Development Goals：持続可能な開発目標）の中でも、教育分野や意思決定プロセス等において「誰一人取り残さない（No one left behind）」というInclusion（包接）の重要性が指摘されている（滝口，2018）。その上で、「共生社会」とは、全ての人が障害・年齢・性別や国籍・民族・信仰等によって差別されず、能力を生かした積極的な社会参加ができ、支援者と非支援者を区別することなく共に支え合いながら生きる社会のことを意味している（林，2022）。

この共生社会の実現のためには、幼児期から違いがある多様な人同士が関わり合う中で、相互に支え合う意識を育むことが重要であると言える。そこで本稿では、幼児が友達や保育者と関わり合うエピソードを通して、幼児を取り巻く人間関係の様相から共生意識の芽生えについて探索することを目的とする。

II 研究方法

1) 調査協力園の概要

愛知県内において「共生」を保育方針に掲げている以下の2園で、事例を収集した。いずれの園も、3歳以上の幼児は異年齢保育形態の中で暮らしており、多様な年齢の子どもたちと関わり合うことを通して、保育者も子どもも共に育ち合うことを意識している。

事例①	事例②
私立X園 (保育園)	私立Y園 (幼保連携型認定こども園)
3～5歳児異年齢クラス 23名	2～5歳児異年齢クラス 40名
保育方針は 「共に生き、共に育つ」	保育方針は 「共生共歩」

2) 調査・分析方法

幼児が友達や保育者との関わり合いの中で、共生意識の芽生えが垣間見られる事例（事例①：第二筆者が当該クラスの担当者として保育を実践する中で収集、事例②：第一

筆者が参与観察を通して収集）を抽出し、逸話記録法を採用した上で、筆者間で協議しながら分析・考察した。

3) 倫理的配慮

日本保育学会の保育学研究倫理ハンドブック（2023）に則って園長・保育者へ研究趣旨を説明し、掲載事例の保育者・園児の名前は仮称にする等、個人情報保護を遵守する旨を伝えた上で承諾を得た。また、本学の研究倫理審査を受審し、実施の承認を得た（大2023-14、大2024-02）。

III 実践事例と考察

以下、幼児同士及び幼児—保育者間の関わり合いにおける事例を紹介すると同時に、共生意識に着目して考察した。

1) 事例①：幼児同士の関わり合いの中で（2023年7月）

【A児の思いを言語化・代弁する友達との関わり合い】

進級当初のA児（3歳男児）は、相手の年齢に関係なく自分の思いが通せないと癇癪を起こして叩いたり暴言を吐いたりする姿があった。トラブルが起きた時に、担任（第二筆者）はA児を叱るのではなく、相手に「A児は〇〇したかったみたいだよ」とA児の思いを代弁する関わりを続けていたことや、A児に乱暴をされても仕返ししたり怒ったりしない年長児の心の広さによって、7月頃には他の年齢の幼児とのトラブルはほとんど無くなっていった。

一方で、同年齢の友達との関わりにおいては、話が通じないと怒って相手を泣かせたり殴り合いの喧嘩になったりするなど、トラブルが続いていた。クラスの年中・年長児たちは、A児が同年齢の友達とトラブルになると「〇〇したかったの?」「本当は〇〇なんだよね」とA児の気持ちを言語化する言葉をかけるようになっていた。A児は、年上の友達からの言葉に最初は素直になれないこともあったものの、少しずつ言葉に耳を傾けることによって、自分の気持ちに気付き、向き合えるようになってきた。

〈考察〉

異年齢クラスという環境の中で、年上の友達にありのままの自分を無条件に受け入れられる経験が、自分の気持ちと向き合い、自己をコントロールする力を育み、穏やかな園生活につながっていったと考えられる。この事例の時期以降、少しずつ年



上の友達とは安心して自己発揮しながら遊ぶことができるようになっていったことから、保育者だけでなく周囲の友達からも「ありのままの自分」を受け入れられる経験が大切であると考えられる。また、年中・年長児には、A児を「困った存在」として排除するのではなく「共に過ごす仲間」として受け入れようとする意識や、A児を「世話の対象」ではなく「同じ立場の存在」であり、お互いが心地よく過ごすために困っていることについて共に考えていこうとする意識が芽生えていたと考えられる。

2) 事例②：保育者との関わり合いの中で（2024年12月）

【クリスマスツリーを組み立てて飾ろう】

4・5歳児（10人）がクリスマスツリーを組み立てる際、「誰かやりたい人いる？」と保育者から尋ねられ、4人の子どもが手を挙げる。土台の脚を保育者と組み立て、三段式のツリー（160cmほど）を下から積み上げると、子どもたちから「やったー！」と大きな歓声があがる。完成したツリーに電飾を点灯しようと、電源の近くまで保育者が重たそうに運ぼうとすると、B児（4歳女児）を中心に「しーちゃん（保育者）、ガンバレ！ しーちゃん、ガンバレ！」と子どもたちが自然と声援を送る。その後、クリスマスツリーが光ると、「ひ〜かった！ ひ〜かった！」と全員が小刻みにジャンプしながら喜ぶ。

その後、飾りを1人1個ずつ好きな場所に飾ったが、子どもが手の届かない高さ（130cmほど）の部分には、保育者がサラッと3個飾る。それを見ていたC児（4歳女児）が、「ねえ、みんな聞いて！ 1人1個だったのに、しーちゃんが3個も飾ってた〜！」と大声で周囲に伝える。すると、子どもたちは一斉に「ずるい！ ずるい！ ずるい！」と再び大合唱になる。保育者が「たくさん飾りがないんだ。タッキー（園長）にお願いしてみる？」と言葉をかけると、子どもたちは園長の傍に行き、「ねえ、タッキー、お願い〜」と笑顔で懇願した。

〈考察〉

共生共歩の保育方針のもと、Y園では子どもも保育者間においても、保育者・園長を愛称で呼び合っている。あえて“先生”と呼称しない園文化は、子どもにとって「保育者との対等的な関係」に根差した意識を涵養していると考えられる。子ど

もから応援されたり指摘されたりするなど、本事例から読み取れる子どもの「大人観」に着目すると、まさに「大人も子どもも共に同じ地平で生きる人」という意識が潜在していると言える。

実際この日のインタビューで、保育者自身も「大人だからっていう風には私はなりたくなくて、同じような立場になれたらいいなって」「大人だけの考えで押し付けるのはよくないし、子どもの方がより色々なことを考えて、より色々な案を持っていると思っているから」と語っていた。保育者の語りからも子どもの世界を尊重しようとする意識が窺えると同時に、このような互いの存在を慮る心情が共生意識の芽生えにつながると考えられる。

IV 総合考察

以上から、保育現場において共生意識を育むためには、幼児のありのままの姿を認め支える友達の存在や、保育者と幼児の対等的関係に根差した子ども観・大人観の涵養が重要であることが示唆された。幼児を取り巻く人間関係は、年齢等に応じた様々な非対等性が存するからこそ、あえてフラットな意識で「友達も大人も人としての価値や尊厳は同じ」であることを認識できるような保育実践が求められていると言える。昨今注視されている「共主体」のように、幼児と彼らを取り巻く人々の双方の主体性がつながり支え合う関係性の構築が、共生意識を育む上で重要な鍵を握っていると考えられる。

引用文献・付記

- ・ 林恵（2021）共生社会，保育・幼児教育・こども家庭福祉辞典，34.
- ・ 滝口直樹（2018）SDGsと共生、そして「権利、筋、ことわり」についての一考察，共生科学，9，44-52.
- ・ OECD（2015）Sustainable Development Goals（SDGs），<https://www.oecd.org/en/topics/sustainable-development-goals-sdgs.html>.（検索年月日：2024年12月07日）
- ・ 無藤隆・増田まゆみ（2021）保育におけるコ・エージェンシー（Co-agency），保育ナビ 10月号，フレーベル館，4-5.
- ・ 事例収集・掲載にご協力いただきましたX園・Y園のみなさまへ、御礼申し上げます。なお、本研究の一部は、日本学術振興会科学研究費補助金（24K05800）による助成を受けて実施した。



保育学生は「多文化共生」をどのように捉えようとしているのか 名古屋朝鮮初級学校付属幼稚園との交流を通して

内田将平（桜花学園大学保育学部保育学科）

キーワード：保育者養成、多文化共生、朝鮮幼稚園

1. はじめに

わが国における在留外国人数は358万人（前年比5.2%増）を超え、過去最高を更新し続けている⁽¹⁾。われわれは、ここ数年、COVID-19という未曾有のパンデミックを経験したわけであるが、このデータが示すところは、COVID-19の影響は一時的なものでしかなく、現在の日本においても外国人住民の増加・多国籍化をはじめとするグローバル化が進んでいることを裏付けていると言える。こうした社会的状況と並行して、ここ20年ほどの間に教育学や社会学の領域で頻出するようになった語が「多文化共生」である。総務省の定義によれば、多文化共生とは「国籍や民族等の異なる人々が、互いの文化的差異を認め合い、対等な関係を築こうとしながら、地域社会の構成員として共に生きていく」こととされている⁽²⁾。わが国の多文化共生にかかわる代表的な政策を列挙すれば、「地域における多文化共生推進プランの策定」（2006年）や「外国人材の受入れ・共生のための総合的対応策」（2018年）などがある。またこれを受けて、地方公共団体においては、多文化共生の推進に係る指針・計画を改訂し、地域社会での活躍推進等新たな視点を盛り込む動きもある。このように、国全体で外国人の受け入れと共生社会づくりに取り組んでいることを窺い知ることができる。

他方、大学教育の現場に目を転じると、近年では、多文化共生を実現するために大学教育の果たす役割が大きいことが指摘されている⁽³⁾。そこで本実践報告では、大学卒業後、教育・保育の現場に立つ学生が、朝鮮幼稚園^(註1)との交流会^(註2)を通じて、いかに「多文化共生」という語を理解しようとしているのか、その一端を示すことで、今後の多文化共生をめぐる高等教育研究に寄与しようと試みるものである。

2. 活動概要

(1) 春の交流会

春の交流会は2024年5月22日（水）にウリ・ユチュオンで行われた。その概要は以下の通りである。

表1 春の交流会の活動内容

10:00	全クラスの園児が一つの教室に集まり「アンニョンハセヨ〜！」と元気よく朝の挨拶をして交流会がスタートした（写真1）。
10:15	各クラスに分かれて活動が行われた。学生は2〜3人に分かれて各クラスに入り、それぞれ朝鮮語の手遊びや歌遊びなどを一緒にした。

10:45	体育館へ移動し鬼ごっこやボール遊びをした。
11:00	学生が事前に計画してきた「フラフープくぐり」や「しっぽとり」などで遊んだ。チーム対抗で遊びを展開したこともあり、とても盛り上がった（写真2）。
11:30	各教室に戻り、学生は子どもたちと先生らと一緒に昼ご飯を食べた。
12:30	各クラスで、学生は子どもたちと一緒に自由遊びをしたり一斉活動に参加したりした。また初級学校の見学もさせていただいた。そして活動の最後には、子どもたちから折り紙で作られたチマチョゴリが学生にプレゼントされた（写真3）。
13:30	



写真1



写真2

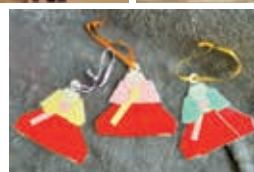


写真3

(2) 秋の交流会

秋の交流会は2024年11月7日（木）に桜花学園大学で行われた。その概要は以下の通りである。

表2 秋の交流会の活動内容

9:50	先生と子どもたちが大学に到着し教室へ移動した。
10:00	学生らが主導して子どもたちと朝の挨拶をして交流会がスタートした。また今回の交流会のテーマが「秋を探そう！味わおう！楽しもう！」であったことから秋にまつわるクイズも行った。
10:15	各学年に分かれて活動を行った。学生は2〜3人に分かれて各学年に入り、学生が事前に用意した紙皿に子どもたちがどんぐりや松ぼっくりなどを拾ってくっつけるのを援助したり、松ぼっくりけん玉やどんぐりマラカスなどの制作の援助をしたりした（写真4）。
11:15	教室に移動し昼食の準備をした。
11:30	子どもたちと一緒に昼ご飯を食べた。子どもたちは学生と活動の話で盛り上がっていた。また早く食べ終わった子は、7号館前の芝生で学生とブランコに乗ったり、鬼ごっこをしたり、だるまさんが転んだをしたりして遊んだ（写真5）。
12:45	子どもたちから歌のプレゼントがあり交流会が終了した。
13:00	



写真 4

写真 5

3. 交流会を通じた学生の意識変容

このような交流会を経て、学生らの多文化共生観はどのように変化したのか。以下に、交流会後の学生の感想を抜粋して紹介する。

学生 A：私は、相手の文化を知ろう（尊重しよう）とする姿勢と、自国の文化や風習を再認識することの視点が重要だと考えました。特に二つ目の視点は交流会前には持ち合わせていませんでした。そのきっかけは、幼稚園の子どもたちが日本語で歌を歌ってくれたことです。

学生 B：私は交流会を通して新しいことを知る楽しさを知りました。将来保育者として働く際も多文化に触れることがあると思うので、そのことを不安に感じたり難しく考えたりするのではなく、新しい文化を知るという前向きな気持ちを持ち続けたいと思いました。

学生 C：私は、将来保育者として働くとき、どんな文化であっても、その違いを理解し認め合った保育ができるよう、普段から色々な文化に触れるということを大切にしていきたいと感じました。

学生 D：これまで異文化の子どもと関わる機会がなかったため、朝鮮幼稚園との交流を通して、異なる言語で交流したり、一緒に遊んだりしたことで、多文化交流の楽しさを知る事ができ、私自身の多文化共生保育・教育観に大きく変化がありました。私は今回の交流会を通して、文化の違いを互いに認め合うこと、尊重する姿勢を見せること、文化や習慣を押し付けないことが大切であると学びました。

学生 E：朝鮮幼稚園との交流会を通して、朝鮮や朝鮮幼稚園の文化・習慣を学ぶと同時に、私自身、自国（日本）の文化・習慣などについても考え直すきっかけになりました。

学生 F：朝鮮幼稚園の子どもたちが自国の文化を大切にし、朝鮮人としての誇りを抱いていることに驚きました。きっとそうした姿が形成されるのは、幼児期から朝鮮学校という空間で、様々な人たちとかわりながら学んでいるからだと考えました。

4. おわりに

交流会に参加した学生の感想からは、自国の文化や考え方とは異なるウリ・ユチウォンの営みを理解しようとする「異質馴化」の側面だけでなく、他者の視点から自分自身にある、ある種のバイアスやありふれた保育の営みを、別の角度から新鮮に捉えなおそうとする「馴質異化」の側面も読み取ることができる。つまり、こうした交流会の実施は、保育学生にとって、ただ単に既知としての「多文化共生」という語を概念として理解するだけにとどまらず、それに対して当事者意識をもって、自身の保育観を刷新していく契機となっていることが明らかだと言える。また、昨今、地域社会において共生社会づくりが焦眉の急となっていることを踏まえてみても、今後もウリ・ユチウォンとの教育的な交流を継続的に実施していく意義は十分にあると考える。

註

- (1) 本学がある愛知県豊明市栄町には、隣接して、学校法人愛知朝鮮学園が運営する名古屋朝鮮初級学校・附属幼稚園、及び、愛知朝鮮中高級学校がある。なお本実践報告では、以後、日頃から研究・教育活動のフィールドとして使わせていただいている敬意を込めて、朝鮮幼稚園を「ウリ・ユチウォン」と表記する。
- (2) 内田ゼミでは、2023年よりウリ・ユチウォンと定期的に交流をしている。その交流の中には、本実践報告で扱うものの以外に、公開保育を見学したり、預かり保育の時間に保育のお手伝いに行ったり、主に週末に開催される夏祭りや運動会に参加したりと、年間を通して、実にさまざまな場面がかかわりをもっている。また、それらすべての場面において学生は自主的に参加している。なお2024年に実施した交流会では、ウリ・ユチウォンの教員4名と園児18名（年少6人、年中5人、年長7人）、及び、内田ゼミ3年生の9名が参加した。

引用文献

- (1) 出入国管理庁（2024）「令和6年6月末現在における在留外国人数について」。
- (2) 総務省（2022）「多文化共生の推進に関する研究会報告書～地域における多文化共生の更なる推進に向けて～」。
- (3) 高橋美能（2019）『多文化共生社会の構築と大学教育』東北大学出版会。



保育実習におけるエピソード記録導入の意義 保育・子どもをより深く理解するための記録のあり方

Dalrymple 規子・石山英明（桜花学園大学保育学部国際教養こども学科）

キーワード：保育実習 エピソード記録 子ども理解 省察

はじめに

保育所保育指針が平成30年に改訂され、保育所の目指す保育は、「子ども主体の保育」であり、「環境を通した保育」であることが強く打ち出された。今までも園内研修や公開保育において、上記2つを主要テーマにおいて実施されてきた保育施設も多い。このような変化が現場で起こっている中、記録の形態も、昨今多様になっている。保育の記録は、子ども理解や保育の省察には欠かせないもので、その様式は例えば、保育マップ型、保育ウェブ型、エピソード記録やエピソード記述、ドキュメンテーション、ポートフォリオ、ラーニングストーリー等、様々である。一方、保育実習における実習日誌についても、大多数の保育士養成施設は本学科も含め一日の保育の流れを時系列に記載する日誌を使用しているが、現在では、ドキュメンテーション型実習日誌や、エピソード記録の実習日誌を導入しているところも増えてきている。実際、全国保育士養成協議会（2024）によると、エピソード記録による実習日誌はかなり多くの養成施設が取り入れている¹⁾。

時系列型の様式は、「保育の流れを理解することは容易であっても、一人一人の子どもを捉える視点が育ちがたいという欠点がある」（小山、2007）という指摘もある²⁾。では、一人ひとりの子どもへの理解を深めていくためには、どのような実習日誌が適しているのか。西垣（1999）は、実際に学生たちが記録した日誌から、学生が「その日その日に心を動かし、感受した様々な思い」がエピソード記録という形で表現されることで、保育者として育つための具体的な課題が見えてくると述べている³⁾。エピソード記録をとることは、保育者としての資質に重要な、子どもの行為の意味を考えるなど子ども理解を深め、自分自身を俯瞰的に振り返る機会となり、子どもを観察する力を高める（Dalrymple、2018）⁴⁾。

国際教養こども学科の保育実習へのエピソード記録導入の経緯

2018年度に開学した桜花学園大学保育学部国際教養こども学科では、1期生の保育実習（2020年度）からエピソード記録の形式を導入した。その背景には、当時の保育界におけるエピソード記録導入の潮流があった。多くの保育園が保育記録の代替としてエピソード記録を採用し始めている中、学生たちがそれを「全く知らない」状態ではいけないとの当時保育実習担当教員であった原田明美の考えから、エピソード記録は導入された。

その当時、原田は以下のようにエピソード記録を評価し、導

入したという。

エピソード記録の最大の利点は、時間の流れにとらわれず、子どもや保育者をじっくりと観察し、その心情に思いを馳せて記録を行うことにある。このアプローチにより、一瞬の出来事だけでなく、その背景や過去の出来事がどのように現在に影響を与えているのかを理解することが可能である。保育者がこの記録を通じて、子どもや保育の理解を深め、自身の保育に対する反省にもつなげることができる。一方で、エピソード記録にはいくつかのマイナス面も存在する。特に、印象に残った出来事を選んで記録するため、他の子どもたちや全体の記録が欠けてしまうことが挙げられる。そのため、エピソード記録を単独で使用するのではなく、時系列の記録と併用することが推奨される。これにより、個々のエピソードを深く掘り下げつつ、全体的な視点も失わずに保育の質を向上させることができると考えた。

では実際に学生たちはどのような学びをしているのだろうか。2つのエピソード記録を見てみたい。

自然と出会い、関わる子どもたちの姿を捉える

記録 1

午前中の戸外遊びの際にプランターに蝶の幼虫がいるのを見つけた。そしてそれを知った子ども達はプランターの周りに集まり、幼虫を観察していた。観察をしている間「動いていないよ」「こっちは動いているよ」「どこにいるの?」「どこにいったの?」「見たい!見せて!」と子ども達は幼虫の様子を実習生に教えてくれたり、それを聞いたほかの子ども達も幼虫を見たがりしている姿があった。また、幼虫が上に登ってくる様子を見た1人の男児がプランターに植えてある花の上に草を乗せている姿があった。そのため実習生が「何しているの?」と聞くと「外に出ないようにしている」と教えてくれた。幼虫を観察する中で2人の男児と女児が幼虫を見て「怖い」と口々にし、プランターから離れていったが、またプランターの周りに集まり幼虫を見て再度「怖い」と言ってプランターから離れるということを繰り返している姿があり、その繰り返しを楽しんでいた。

（学生の考察）

最初プランターにいる幼虫を見て子ども達は幼虫を怖がって近くにはいかないのではないかと考えていたが、子ども達の頭でプランターの中が見えないぐらい子ども達が幼虫に興味津々であったため、想像と違う子どもの様子が見ることができてとても驚いた。観察をしている間は幼虫に触ろうとしたり、枯枝で突こうとしたり、顔を近づけたりしている様子が見られたため、「触ったらいけないよ」と声をかけたり、命の大切さという観点から「ちゃんちゃんしないでね」などと声をかけたが、触ろうとした

り、突こうとしたりするのは子ども達とその幼虫に初めて出会い、それがどんなものなのかを知りたいという好奇心の表れなのではないかと考えた。(後略)

考察にあるように、学生は、子どもが自然と出会い、関わる中での彼らの心の機微、子どもにとって自然と関わることの意味を肌で感じている。保育者として何を大事にしていく必要があるのかを体験の中で考える機会となったエピソードといえる。

子どもの遊びの姿と自分自身の対応について省察する

記録2

おやつ後の自由時間の時、H組は室内で2種類の手押し車2台ずつ(合計4台)と蜂の乗り物、犬の乗り物、ブロック、絵本で遊んでいた。手押し車は、押して歩くと鳥が動く仕組みになっている手押し車とハンドルの前に玩具を入れて運べる手押し車があった。保育者が手押し車を用意した時、Aくんは喜んでそばに駆け寄り遊ぼうとした。しかし、ハンドルの前に玩具などを入れて運べる手押し車は既にBちゃんとCくんが使っており、Bちゃんが遊んでいる手押し車で遊びたかったAくんはBちゃんが使っている手押し車に体を重ねて乗ろうとしていた。実習生が「先にBちゃんが使っているから、後でかわってもらおうね。」と伝え、Aくんの体の向きを変えた。すると、Bちゃんが遊んでいる手押し車に執着することはなく、もう一つの手押し車に関心を持ち、その手押し車の方へ走っていった。しかし、しばらくその手押し車で遊んでいると、またBちゃんが遊んでいた手押し車に向かっていき、かわってもらいたい様子を繰り返し見せた。そのうち手押し車が空いたことでAくんはBちゃんが遊んでいた手押し車で遊ぶことができた。直線に手押し車を走らせては壁やロッカーに衝突してそこで角度を変えろというように衝突してから向きを変えるという動きを繰り返していた。

(学生の考察)

(前略) 私は先に手押し車を使っていたBちゃんを優先した対応をしていたが、Aくんが他の手押し車で遊んでいる時に、他の子どもがその手押し車で遊び始めることもあり、Aくんに申し訳ないことをしたと思った。Aくんが遊びたかった手押し車の様子を確認して空いた時に「Aくん、空いたよ」と声をかけたり、Aくんが待っていることを他の子どもに伝えたりしたい。(後略)

Aくんの事が分かりたいとの思いがあるからこそそのエピソード記録であろう。自分の対応がどうだったのか、Aくんの本当の思いはどうだったのか、Aくんと一緒にいる時も、保育後の

記録を書いている時も思い巡らしていることが分かる記録である。

実習での学生の学びを深めるために

上記の2つのエピソード記録からは、学生たちがそれぞれに違った視点から、子ども理解を深めたり、自分の保育について省察したりしていることが表れている。西垣(1999)はその他、保育者の姿から考えることであったり、子どもの行為から内面を読みとることであったりと多様な視点を述べている³⁾。保育は「毎日の普通の生活の中にこそ大切なことが含まれている」からこそ「立ち止まってそのことを見直してみる」ことが非常に重要である(津守、1997)⁵⁾。実習においても、この日常に意識を向け、立ち止まるのにエピソード記録は有用な方法であろう。

国際教養こども学科では、保育実習で実習日誌にエピソード記録を導入しただけでなく、教育実習入門でも、子どもの遊びを通した学びを捉えるためラーニング・ストーリーを導入した(森山他、2023)⁶⁾。4年間の様々な実習を通しての学生の学びを深めるために、さらに検討をしていきたいと思っている。

引用・参考文献

- 1) 一般社団法人全国保育士養成協議会(2024) 指定保育士養成施設及び実習先保育所の実習指導担当者に対する効果的な研修の在り方に関する調査研究報告書, 令和5年度子ども・子育て支援推進調査研究事業(こども家庭庁) 14.
- 2) 小山祥子(2007) 幼児理解と保育者の援助理解を深める保育記録に関する研究(Ⅱ) —エピソード記録型実習日誌の効用と課題—北陸学院短期大学紀要, 39, 45-58.
- 3) 西垣吉之(1999) 第2章 学生の乳幼児理解への育ちを促す保育の記録のあり方に関する研究—エピソード記録の有効性を問う視点から—, In 伊藤祐子・西垣吉之・古川芳子著「実習記録におけるエピソード記録の妥当性と有効性に関する研究」, 日本私学振興財団助成「特色ある教育研究の推進」研究報告書, 7-32.
- 4) Dalrymple 規子(2018) 第4章 保育の記録と計画, 改訂5版 資料でわかる乳児の保育新時代, 乳児保育研究会編, ひとなる書房.
- 5) 津守真(1997) 保育者の地平, ミネルヴァ書房, 50.
- 6) 森山雅子・寺田恭子・田端智美・酒井久美子(2023) 共主体性を意識した実習指導のあり方—学生の素朴な疑問や意見を大切に. チャイルドエデュケーション研究所年報21号.

宮沢賢治の描いた子どもたち 脱マニュアル主義の為に

太田昌孝（名古屋短期大学 保育科）

キーワード：脱マニュアル。イマジネーション。風の又三郎。

1 脱マニュアルのための宮沢賢治

人間と言う存在を真に人間として成立させる為に必要なことは、言葉の錬磨と探求である。人間は言葉なくしては人間として生き延びることはできない。ここで言う言葉とは、音声によるもののみならず、人間の意識や感情に潜む、内的言語を含むことは言うまでもない。人間は常に「人間」であり続ける為に、言葉と対峙し、時には離反しながら、言葉の作る軌道を行き来する存在である。それは「日の巫女」が神の託した箴言を拝受し、それを民に伝える為に「神の声」を創造した古代から普遍の営みでもある。

現今、社会に蔓延るマニュアルと言う名の、一見 objective な衣を纏った印字の羅列は、それを使用する者に一定の規範と常軌を与える意味においては市民権を有する。しかし、マニュアルが人間を操作し、本来人間が持ち得る豊かなイマジネーションも領域を浸食することは、「バベルの塔」以降、（若しくは古代日本で言うところの神託への返信以降）人間が保持してきた存在条件としての言葉そのものを喪失させかねない由々しき事態でもある。

そのような「マニュアル主義」の現況に爽やかな衝撃を与える一つが、宮沢賢治によるイマジネーションの営みである。マニュアルの域を出ることができない瘦せ細った感性の人間は、「取りあえず規定通りに行えば、自分が非難されることはない。マニュアルを振りかざせば、一応の理解と皮相の正義だけは守れる。」という野卑な思考を恥ずかしげもなく提示する。だが、逆にこうした貧困で卑しい思惟を、賢治の豊かなイマジネーションが見事に凌駕するのを見るのは実に痛快である。「マニュアル主義」がその食指を延ばそうとすればするほど、賢治の堅牢で深淵なイマジネーションは生きる力を獲得し、読者を言葉の心地よい臨界へと誘う。

賢治が描く作品世界は凡そ彼の故郷であるイーハトーブ（岩手県）を母胎としている。しかし、それは実景そのものではなく、彼の視線と感官とを通じて丹念に彫琢された、言わば technique の産物である。そしてこの technique を支えるのが、他ならぬ賢治のイマジネーションであることは容易に理解できよう。

2 賢治が描いた子ども——『風の又三郎』をテキストに

宮沢賢治は約100編の童話と1000編の詩（心象スケッチ）を書いた文学者である。当然、対象は子どもであるが、その親や教師、保育者もそれに含まれると考えてよい。賢治は多くの子どもを作品の中で描いているが、真っ先に私の脳裡を過るのは『風の又三郎』に登場する、山の分校の子どもたちである。そこには現代が喪失しかけている伸びやかで明朗な



土沢駅前のモニュメント（筆者撮影）

「等身大の磁場」が描かれている。

どっどど どどうど どどうど どどう
青いくるみも吹きとばせ
すっぱいかりんも吹きとばせ
どっどど どどうど どどうど どどう

谷川の岸に小さな学校がありました。

教室はたった一つでしたが生徒は三年生がいないだけで、あとは一年から六年までみんなありました。運動場もテニスコートのくらいでしたが、すぐうしろは栗の木のあるきれいな草の山でしたし、運動場のすみにはごぼごぼつめたい水を噴く岩穴もあったのです。

さわやかな九月一日の朝でした。青ぞらで風がどうと鳴り、日光は運動場いっぱいでした。黒い雪袴をはいた二人の一年生の子がどてをまわって運動場にはいって来て、まだほかにだれも来ていないのを見て、「ほう、おら一等だぞ。一等だぞ。」とかわるがわる叫びながら大よろこびで門をはいって来たのですが、ちょっと教室の中を見ますと、二人ともまるでびっくりして棒立ちになり、それから顔を見合わせてぶるぶるふるえましたが、ひとりはどうとう泣き出してしまいました。というわけは、そのしんとした朝の教室のなかにどこから来たのか、まるで顔も知らないおかしい赤い髪の子供がひとり、いちばん前の机にちゃんとすわっていたのです。そしてその机といたらまったくこの泣いた子の自分の机だったのです。（中略）

すると嘉助がすぐ叫びました。

「ああわかった。あいつは風の又三郎だぞ。」⁽¹⁾

この作品の舞台は、遠野市の上郷小学校であるとする説がある。（他説もあり。）上郷小学校には賢治の花巻農学校での教え子、沢里武治が教師として勤務しており、賢治はこの小学校に沢里を訪ねている。この小学校が『風の又三郎』の舞台であるか否かは、確証が持てないが、賢治の教え子への想いを考え併せる時、どうしてもここが舞台だと信じたい。村の分校に忽然として、奇妙な身なりの転校生がやってくる。この高田三郎と名乗る少年を巡り、賢治特有の異次元と現在とが混交した作品世界の中で、子どもたちは伸びやかにそして確かに成長の碑を刻んでゆく。因みに「風の又三郎」が持つ primitive な祖型は、東日本から信越地方にかけて、幅広い地域に伝わる「風の三郎伝説」に依拠するとも思われる。「風の三郎」とは「風の神の子ども」であり、台風除けの神として信仰を集めている存在でもある。転校生、高田三郎が分校にやってきたのは9月1日、つまり「二百十日」の日当たる。古くから台風の大風が吹くと伝えられる日でもある。

「それからこのお休みの間にみなさんのお友だちが一人ふえました。それはそこにいる高田さんです。そのかたのおとうさんはこんど会社のご用で上の野原の入り口へおいでになっていられるのです。高田さんはいままでは北海道の学校におられたのですが、きょうからみなさんのお友だちになるのですから、みなさんは学校で勉強のときも、また栗拾いや魚とりに行くときも、



新花巻駅前のレリーフ (筆者撮影)



『風之又三郎』(初版本・複製)、『宮沢賢治の地平を歩く』(筆者近著)

高田さんをさそうようにしなければなりません。わかりましたか。わかった人は手をあげてごらん下さい。」

すぐみんなは手をあげました。その高田とよばれた子も勢いよく手をあげましたので、ちょっと先生はわらいましたが、すぐ、「わかりましたね、ではよし。」と言いましたので、みんなは火の消えたように一ぺんに手をおろしました。

ところが嘉助がすぐ、
「先生。」といってまた手をあげました。
「はい。」先生は嘉助を指しました。
「高田さん名はなんて言うべな。」
「高田三郎さんです。」

「わあ、うまい、そりゃ、やっぱり又三郎だな。」嘉助はまるで手をたたいて机の中で踊るようにしましたので、大きなほうの子どもらはどっと笑いましたが、下の子どもらは何かこわいというふうにしいんとして三郎のほうを見ていたのです。(中略)

みんなはばたばた鞆をあけたりふろしきをといたりして、通信簿と宿題を机の上に出しました。そして先生が一年生のほうから順にそれを集めはじめました。そのときみんなはぎょっとしました。というわけはみんなのうしろのところにいつか一人の大人が立っていたのです。その人は白いだぶだぶの麻服を着て黒いてかてかしたはんけちをネクタイの代わりに首に巻いて、手には白い扇をもって軽くじぶんの顔を扇ぎながら少し笑ってみんなを見おろしていたのです。さあみんなはだんだんしんんとって、まるで堅くなってしまいました。⁽²⁾

突然の来訪者(まれびと)に騒然とする分校の教室の描写は、賢治が稗貫農学校(花巻農学校)に新任教員として赴任した頃の実景と重ねて読むと興味深い。賢治先生もまた、農学校の朴訥として純真な生徒の前に出現した「まれびと」であった。

加えて、子どもたちの声が明るく木霊する分校の複式学級の風景は、読者を共感させ、緩やかに懐柔する大気に満ちている。子どもたちの間に自然発生的に生まれたであろう、上級生・下級生と言うヒエラルキー。これは決して階層制度ではなく、尊敬と畏怖そして愛情に満ちたものである。

思えばかつて学校という空間は、この作品に登場する教室のような大気に包まれた空間だった。それではそのような空間を、愛おしく思い出さねばならない、現代の学校には何が欠けているのだろうか。それは本論冒頭で述べたイマジネーションに他ならない。嘉助が「高田三郎」という名前を「平凡な名前だ」とせず、伝説の風の神の子ともである「風之又三郎」へとその連想を広げることができるのは、決して知識の産物ではなく、子どもらしい伸びやかな「イマジネーション」の産物であることは言うまでもない。嘉助は豊かな自然と奥深い民俗に護られたイーハトーブの山里で、知らず知らずのうちにイマジネーションの翼を磨いた少年である。

「わあい又三郎、まだひとさ水掛けだな。」

「風が吹いたんだい。」

みんなはどっと笑いました。

「わあい又三郎、うなそごで木ゆすったけあなあ。」

みんなはどっとまた笑いました。

すると耕助はうらめしそうにしばらくだまって三郎の顔を見ながら、

「うあい又三郎、汝などあ世界になくてもいいなあ。」

すると三郎はずるそうに笑いました。

「やあ耕助君、失敬したねえ。」

耕助は何かもっと別のことを言おうと思いましたが、あんまりおこってしまって考え出すことができませんでしたのでまた同じように叫びました。

「うあい、うあいだ、又三郎、うなみだいな風など世界じゅうになくてもいいなあ、うわあい。」

「失敬したよ、だってあんまりきみもぼくへ意地悪をするもんだから。」三郎は少し目をパチパチさせて気の毒そうに言いました。けれども耕助のいかりはなかなか解けませんでした。そして三度同じことをくりかえしたのです。

「うわい又三郎、風などあ世界じゅうになくてもいいなあ、うわい。」

すると三郎は少しおもしろくなったようでまたくつつつ笑いだしてたずねました。

「風が世界じゅうになくてもいいってどういうんだい。いいと箇条をたてていってごらん。それ。」三郎は先生みたいな顔つきをして指を一本だしました。⁽³⁾

初期型『風野又三郎』は、「九月二日」の項で、又三郎自身が、「風野(の)又三郎」だとあっさり認め、分校の子どもたちも、それを素直に受け入れている。互いの屈託のない距離感の取り方には驚かされるが、賢治の筆にかかると、このような「超現実」も確かなリアリティを有するから不思議である。そして、この確かなリアリティを保証しているのは、他ならぬ子どもたちの躍動する生であると共に、賢治自身の教師体験であることは言うまでもない。

教師、宮沢賢治は、花巻農学校時代の教え子の証言によると、他に類を見ない発想を次々と生徒に提示し、それを生徒と協同しながら遂行する愉快な先生であったようだ。賢治の教え子の一人である、照井謹二郎氏は、後に花巻みなみ幼稚園長として幼児教育に携わったが、その活動の中で特筆すべきは、賢治作品をオペレッタにして、園児に上演させ続けたことである。教師宮沢賢治との出会いが、照井氏の人生に大きく影響を及ぼしたことは疑いない。賢治そして照井氏と引き継がれた legacy は、現在の花巻でも脈々と受け継がれ、子どもたちの豊かな生を創出している。賢治が愛したイーハトーブの地平を歩く旅は、賢治が子どもたちへ向けた、慈悲の視線を確かめる旅でもあるのだ。

引用文献

- ・(1)～(3)「青空文庫 風之又三郎」(2012年7月19日修正・<http://www.aozora.gr.jp/>)

参考文献

- ・『兄のトランク』(宮沢清六・筑摩書房・1991年12月)
- ・『宮沢賢治の地平を歩く』(太田昌孝・クロスカルチャー出版・2024年4月)

共に学び、共に生きる 多様性理解と協働力を育む実践報告

杉山実加（名古屋短期大学 保育科）

キーワード：保育者養成、思考ツール、協力・協働

はじめに

共生社会を担う子どもたちの育ちを支えるためには、保育者自身が、人々の多様な在り方を認め、自らも含めて多様な人々と協働していくこと、それに必要なコミュニケーション力やコンピテンシーを身につけていることが求められる。これからの社会を見据えた人材育成では、専門性を有するだけでなく、思考力・判断力・俯瞰力・表現力なども求められている。本実践報告では、そうした保育者自身の力量形成に向けて、保育科2年「幼児教育指導法」での他者理解や他者との協力に関する活動に焦点を当てて、実践を報告する。

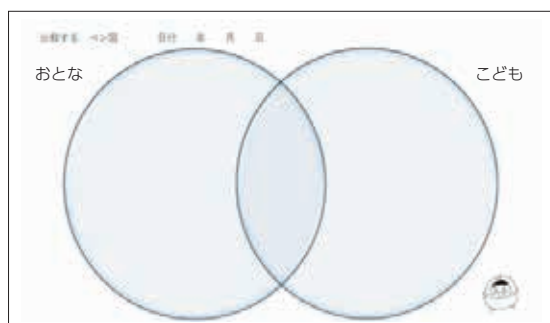
1 違いを知る・楽しむ

多様であることを受け入れていくためには、違いを知り、それを肯定的に受け入れることが必要である。学生の中には、多様な回答が存在する「オープクエスチョン」に苦手意識を持つ者も多い。そこで、授業の序盤では、まずは違いを楽しみながら他者との関わる機会を設定している。「大人と子どもは何が違う？何が一緒？」という視点で、大人と子どもの比較を行う。大人を18歳以上、子どもを就学前と定義し、表1に記した手順で「ベン図」に書き込んでいく。

学生間で意見交換をすると、自分が考えていなかった事を他者が書いているため、互いの意見に驚きや感動を示す学生が多い。その後、クラス全体で意見交換も行い、他者と協力するほど記載項目の数が増えていく経験をする。例年、大人にしか当てはまらないこととして挙がることは、選挙権、運転免許の取

表1

1	3分間、個人で書き出す
2	3分間、他者と意見交換をして書き足す
3	クラス全体で意見交換（発表）
4	小学2年生の考えた内容を見る

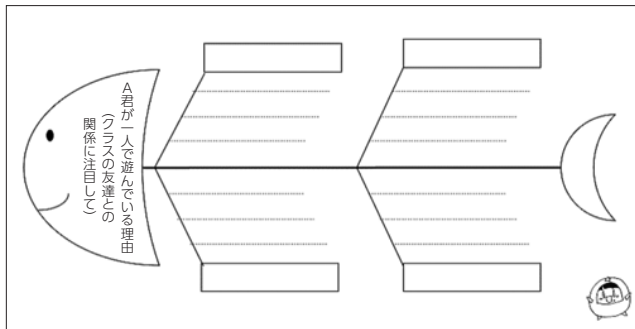


得、喫煙・飲酒、夜遅くまで外にいても怒られない、自由だが責任は自分が取る等、短大生の自分たちが大人になって出来るようになったことが多い。一方、子どもにしか当てはまらないこととしては、幼稚園や保育園に行く、サンタクロースからプレゼントがもらえる、昼寝をする、保護者が責任を取ったり生活の面倒をみたりする、乳歯がある等である。そして、共通点としては、感情や権利、睡眠や食事等が挙げやすい。他者との意見交換について、「自分は思いつかなかったことを友達が書いていて凄いと思った」、「協力して書き出すのが楽しい」などの感想が出る。他者と自分が違うから面白いのであり、異なる視点を持った者同士が協力することで互いの視野や考えが広がることを体感していく。

クラス内での共有を終えたところで、小学生の考えを紹介する。「背が高いのが大人、背が低いのが子ども」、「大人には積み重ねてきた知能がある、子どもは体を温める力がある」、「子どもはたくさん夢がある、大人は多分夢が少ない。けど、共通して夢を叶えるために頑張っている」、「大人は自分の意見を持っている、子どもは自分の意見をあまり詳しく言えない。どちらも頭を使って考えている」、「大人も子どもも人間、地球に生まれた、足がある」など、学生が考えていない視点での比較を行っている。こうした小学生の考えに触れると、学生間での意見共有では見られなかった驚きと動揺が見られる。授業後の感想には、「自分は考えが堅いと思った」、「いつの間に柔らかい考えができなくなったのか」、「立場が違うと同じものを見てもこんなに違うんだと驚いた」といった感想が寄せられる。同級生と広げた視野が、小学生によってさらに広がりを見せたことに驚いたり、楽しさを感じたりしながら、違いを恥ずかしがらずに肯定的に受け止め扱っていく基礎を作っていく。

2 多面的に考える

次の段階では、ある問いに対して複数の原因・要因を考えることに取り組む。授業では、個と集団の関係・総合的な指導の方法に関する学びの中で、「フィッシュボーン図」を活用して、子どもの行動理由を検討する。これは最大4つの考えを書くことができるように作図されている。授業では、少なくとも2つは自分で書くこととし、残り2つは個人で取り組んでも、他者と相談しても良いとしている。学生たちは、必要に応じて自分から他者に相談したり協力を求めたりする。教員から言われたから他者と意見交換をする、という外発的動機付けによる協力ではなく、自分にとって有意義・面白いから、という内発的動



機付けに基づく協力を経験する。学生の様子を見ていると、他者と相談しながら考えをまとめる学生もいれば、自分が書いていない考えを他者からもらったり、4つ全てを自分で書き終えてから、さらに他者に声をかけたりする学生もいる。学生からは、「2つ目からが難しい。けど、友だちに聞いたら新しい考えが見えた」、「自分はネガティブな理由ばかりを書いていたが、友だちはポジティブな理由を書いていて『なるほど』と思った」などの感想があり、自分の考えの偏りに気付いたり、別の視点から課題を捉えるヒントを他者から得ようとしていることが窺える。また、「実習に行ったら、子どもについて色々な視点から考えたい」と、身につけた思考力を実践に結びつけていこうとする学生もいる。

3 協力して問題解決に取り組む

ここまで、「ベン図」や「フィッシュボーン図」を活用したグループワークを通して、学生たちは多様な意見が出ることを面白く・楽しく感じながら、多様に考えることを到達点として学びに取り組んできた。これらの学びを経て、後半の授業では、チームで問題解決に取り組み、多様な見解を1つの回答にまとめる協働活動を体験する。

授業では、絵本の物語が遊びに発展した実践例を題材に、保育者の行った環境構成など、遊びの援助や指導方法について理解を深めている。①遊んでいる子どもの写真（9場面）、②題材となった絵本、③保育者が環境構成として準備したもの一覧、④遊びの中での子どもの会話一覧、⑤保育者が見とった子どもの姿、を別々の資料として学生に提示する。学生たちは、保育者が環境構成として準備したもの（③）、遊びの中での子どもの会話（④）を、①遊んでいる子どもの写真（9場面）の各場面に当てはめていく。この課題では主観での判断はできず、複数の情報からわかることを組み合わせる判断が必要となる。「あなたはと思う？」という自分の考えを自由

に述べるのが得意な学生にとっては難しい課題となっている。

2～4人チーム、制限時間80分間で問題に取り組む。写真からわかることを仲間に伝えたり、「ここで〇〇を用意しているから、こっちでこんな遊びになってるんじゃない？」と自分の考えを仲間に伝えたり、「でも、こっちにもそれ使ってない？」と仲間に尋ねたり、「確かに！そう考えると上手く繋がる！」と仲間の意見に共感したりする姿がある。たくさんの考えを出すことに慣れてきた学生たちであるため、意見交換は活発だが、そこから「回答を1つにする」ことに苦戦するチームが多い。まずは制限時間内に終えること、悩んだ時は、チーム全員がより納得できる回答を選ぶこと、などを助言しながら、教員ではなく自分たちで「回答を1つにする」経験を積む。回答を1つにまとめる際、声の大きい人、発言した人の意見を根拠なく採用していくチームもある。状況に応じて、発言していない学生に敢えて教員が声をかけてチームの検討状況を聞き取ったりすることで、話し合う機会を持てるようにしている。



4 これからの展望

現在の授業実践では、時間の見通しを教員が示している。そのため、学生自身が、時間を気にしながら進行する力が伸びにくい。自分やチームのメンバーが何かに取り組むとき、それにどの程度の時間が必要なのか、いつまでに終わらせなければいけないのか、といった見通しを自ら持てるような授業運営を試行していくことが今後の課題である。

参考文献

- ・中央教育審議会「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン（答申）」2018。
- ・黒上晴夫・小島亜華里・泰山裕「シンキングツール～考えることを教えたい～」NPO 法人学習創造フォーラム、2012 (http://ks-lab.net/haruo/thinking_tool)。
- ・速水敏彦『内発的動機づけと自律的動機づけ：教育心理学の神話を問い直す』金子書房、2019。
- ・木村明憲『自己調整学習 主体的な学習者を育む方法と実践』明治図書出版、2023。

子ども食堂開催の実践報告

吉見 昌弘・八幡 美保（名古屋短期大学 保育科）
キーワード：子ども食堂、カレーライス、行事

1 子ども食堂とは

子ども食堂とは、「子どもが一人でも安心してこられる無料または低額の食堂」とされている¹⁾。子ども食堂は、低額で食事ができる場だけではなく、第4次食育推進基本計画²⁾にも「地域における共食の推進：子供食堂や通いの場など地域での様々な共食の場づくりを推進」と示されているように、子どもの居場所としての役割も持つ。

さて、「子ども食堂」と聞くと、貧困の子どもが食事に行く場所、子どもだけが利用できる食堂、夕食がタダで食べられる、出てくる食事はカレーライス…といったイメージがあるのではないだろうか。子ども食堂創始者によると、貧困の子どもだけでなく全ての子どもが気軽に「居る」ことができる場所が子ども食堂の始まりだったという¹⁾。そして、現在、子ども食堂の数は全国で約1万か所を超えたとの発表があった³⁾。このように、子ども食堂は国内での需要が大きく今後も子ども食堂開催の場が増加していくことが予想される。一方、子ども食堂の数が増加しても、“来てほしい人に来てもらえない”というジレンマに陥らないよう、その取り組み方にも工夫が必要である。

本誌では、「学生食堂等の大学キャンパスで、学生がスタッフとして子ども食堂を開催することで地域貢献及び学生の教育活動にどのような効果があるか実践を通して検討する」ことを目的に、試行的に子ども食堂を開催した。その実践事例を報告する。

2 大学における子ども食堂の取り組み

大学キャンパス内における子ども食堂の取り組みの事例は少なく、多くは学生ボランティアなどが、地域の子どもの食堂や、公民館など借りて実施するケースが多い。本学学生食堂は、昼休みなどは学生の利用が多いものの、朝や夕方などは学生が自習や歓談の場で利用するのみである。また、菓子類は販売されているものの食堂としての利用はされていない。そこで、学生の利用しない夕方の時間帯に学生食堂を利用して子ども食堂を実施できないかと考え、実践を行うこととした。

3 子ども食堂開催の実践報告

本学保育科2年生の保育実践演習等の時間を利用して、子ども食堂を開催した。実践報告については、個人情報の保護のため、個人を特定できないように記述し、人権や研究倫理に反しないものとしている。また、アンケート及び写真撮影の際、事

前に研究活動のみに使用することを伝え、許可を得た。

(1) 開催までの流れ

前例の無いことから事前に、学生食堂の店長及び学長、事務局長に活動の許可をもらった。さらに食事を提供する活動であることから、愛知県瀬戸保健所豊明分室に相談し、バザーの開設届を申請し、食品に関する指導を受けた。学生スタッフは、開催までにゼミの時間を利用して提供する食事やイベント等の活動計画を立て、試食を行った。

開催の案内は、試行的な試みのため、対象者を限定し本学附属幼稚園の保護者および、栽培活動で交流がある特定の小学生とした。

(2) 開催日の実践

① カレー：2024年12月10日（火）

「カレーライス&ぴかぴか光るクリスマスツリーを作ろう」をテーマに実践をした。参加者は、9組の親子であった。料理は、学内の調理室で行い、カレーライスは子ども向けに食材を小さく刻み、甘口のカレールーを用いた。当初の計画では、食事してからクリスマスツリーを作って楽しむ予定であったが、子ども達の希望で制作を優先して行った。製作は、各自の小型のツリーを製作し、それに光るLEDライトの装飾を施すシンプルなものであったが自宅で飾ってもらえるように配慮した。食事は、子どもと保護者に提供したが、食材があまったため、おかわりにも応じた。保護者は、子どもと一緒に製作に取り組む人や親同士で歓談する人などさまざまであった。保護者からのアンケートでは、カレーやハンバーグを食したいという希望や時間帯を遅らせて欲しいなどの意見をいただいた。また、「友達とおしゃべりしながら食卓を囲むことができるとても良い思い出になりました」など肯定的な意見が多かった。学生のアンケートでは、「衛生面で注意することが多くて神経を使った」「全員で協力して作る物、遊び、案内役などを決めるのが大変でした」などの声がある一方、「（保護者から）来て良かった。楽しみにしていた。という言葉もらって嬉しかった。」などの意見もあり、実践としての意義を感じられたと思われる。

② 冬至：2024年12月17日（火）

「もうすぐ冬至（かぼちゃスープ・スイートポテト・クッキー&クッキーに絵を描こう）」をテーマに実践をした。参加者は、13組の親子と小学生6名であった。料理は、学内の調理室で行い、学生食堂をお借りして提供した。クッキーには、



市販のチョコペンを利用して絵を描くこととした。12月はクリスマスや大晦日など大きな行事があるが、一年の中で最も昼の時間が短く、かぼちゃを食べたり柚子湯に入ったりする風習がみられる“冬至”についても知ってもらいたいことから、季節を感じられる冬至にちなんだ食事を選択した。

食事を提供する場には、スクリーンとプロジェクタを設置し、クリスマスに因んだアニメを映し出した。子どもが飽きないようにとアニメを投影したが、幼稚園の子どもはスクリーンに写る自分の影に興味を示し、複数名で様々なポーズをして楽しんでいた。小学生はアニメを見て楽しんでいた。

かぼちゃスープ、スイートポテトとクッキーを提供したところ、子どもはチョコペンでクッキーを着色したり、絵を描くことを楽しみ、その後は保護者と試食していた。保護者からのアンケートでは、子ども食堂で提供してほしい料理は、おにぎり、サンドイッチ、ピザ、からあげ、ケーキ、ゼリーといった軽食が良いという意見があった。また、「今回のクッキーのデコレーションのように一緒に楽しめるもの」、「なかなか手作りおやつを作ってあげられないのでこういった体験ができるのは嬉しい」といった意見をいただいた。昼食や夕食の時間帯の開催であれば、カレー等の食事の提供が望ましいが、今回は、幼稚園の降園後の開催であったため、この時間帯であれば夕食に影響しないおやつ系のメニューが良いだろう。そして、子どもが楽しく体験できるものや、親子で一緒に取組める活動が組み込まれていることも大事なポイントであった。

一方、「かぼちゃやさつまいものような甘い味が苦手な子が食べてくれた!」といった食に関する感想もいただいた。家庭や給食では食べられない食材や味があっても、このような日常とは雰囲気異なる場では苦手なものにも挑戦するチャンスになるため、子ども食堂は子どもの食の課題に向き合う場になることも考えられる。他にも、「大学のお姉さんと一緒に遊ぶ機会を楽しみにしているのでも嬉しかった!」との好意的な意見もいただいた。キャンパス内に、大学・短大・幼稚園が併設されているメリットを共有し、最大限に生かしていきたいと



思った次第である。

学生の振り返りでは、「季節の食材を使ったおやつを考えることや、子どもが楽しめる工夫が難しかった」、「子どもの年齢を考えて食べやすい大きさや形にすると良かった」といった工夫や改善点が挙げられた。また、「保護者同士の関わりや、先生と話す場面が見られ相談したり関わりを深めたりできる機会になった」、「保護者の方から『子どもが楽しんでくれて良かった』と優しく接してくださりととても良い機会を経験することができた。」との感想があり、コミュニケーションが大きく前進した活動になったことが分かる。今回の取り組みで“ただ食べるだけ”ではない、子ども食堂の役割を体感できたのではないだろうか。特に、学生にとっては子どもからの「おいしかった」という言葉が励みとなり、大きな達成感を味わえた1日であった。

まとめ

本実践を通して、学生食堂や調理室など学生が利用しない時間帯と場所を有効活用することで子ども食堂の実施が可能であることが立証された。一方、食を扱う活動のため、衛生的な面での学生指導が重要であることが課題となった。今後も実施する場合、附属幼稚園の親子の参加のみでなく、子どもの居場所づくりとして近隣の小学生などにも門戸を広げることが必要と考えられる。

また、本学保育科が開催する子ども食堂の特徴として、子どもが好きなメニューの提供だけでなく、地域の特産物の利用や食育活動につなげられるような取り組みを提供し、なにより保育者となる学生の教育効果につながることに期待する。引き続き、子ども食堂を開催して地域との交流や学生の実践力を身に付けていきたい。

引用・参考文献

- 1) 広がれ、こども食堂の輪! 全国ツアー 公式パンフレット [第1版] http://kodomoshokudo-tour.jp/pamphlet/kodomoshokudo_tour_pamphlet.pdf (最終閲覧日: 2024年12月20日)
- 2) 厚生労働省, 第4次食育推進基本計画, 2021年
- 3) NPO 法人全国こども食堂支援センター・むすびえ, <https://musubie.org/kodomosyokudo/> (最終閲覧日: 2024年12月20日)

夏季保育セミナー(報告)

遊びを一緒に楽しもう 明日から使える保育実践

報告者：桜花学園大学保育学部保育学科 伊藤茂美

名古屋短期大学・桜花学園大学保育学部を卒業した若手保育者を対象とした本年度の夏季保育セミナーを7月7日(日)13:30~15:00に開催しました。

本年度の研究所のテーマは「共生社会を担う子どもの育ちのために」です。さらに、夏季保育セミナーのテーマを「遊びを一緒に楽しもう—明日から使える保育実践—」とし、子どもたちの育ちのために、まずは若手保育者の心が安定し子どもと楽しく生活や遊びを繰り返していけることを願い、5つのブースを作り希望のブースで楽しめるように考え実施しました。また、ブースのリーダーは、本学の卒業生で経験豊富な先輩保育者に担っていただき、若手保育者と共に和気あいあいと進めていけるようにしました。

会場は、昨年同様、8号館1階の開放感溢れるガラス張りのオープンスペースに加えて、3階の広々としたリズム室も利用し、どのブースもゆったりと過ごせるようにしました。

当日は、先輩保育者の中にはお子さん連れの方もみえ、お子さんも若手保育者に混じって一緒に遊び、温かい和やかな雰囲気の中、あっという間の時間でした。

者の思いを聴くことができることはうれしいと、快くセミナーを引き受けてくださったことが、話し合いの中で語られました。改めて、母校で繋がる良さを実感したセミナーでした。



①触れ合って遊ぼう

先輩保育者からわらわうた遊びの実践の仕方、ポイントを教えていただきました。

1年目から3年目となる保育者が友だち同士で参加し、自己紹介では同じ自治体の職場であることが分かるとお互いに親近感が湧いたようで、先輩保育者から教えて貰う遊びを存分に楽しみました。単に遊びの紹介のみならず、どのような場面で使うとより楽しめるのか、現場に即したお話も聞くことができ、「さっそくやってみよう」という声が挙がっていました。1つの遊びから、発達年齢に合わせたアレンジの仕方も紹介され、後輩たちは納得しながら聴き入っていました。

さらに、先輩保育者がCDを持参してくださり、運動会で使っている子どもたちに人気の体操も実践し、盛り上がりしました。行事で使いやすい歌も教えていただきました。名短保育科の先生が飛び入り参加して下さい、みなさんは学生に戻った気持ちで楽しんでいました。

また、先輩保育者からは、後輩に伝えるだけでなく新任保育

②触って遊ぼう

先輩保育士2名と一緒に、泡遊びを楽しみました。ボウル、泡立て器、ホイッパー、すりおろし器といった調理器具が机の上に並び、一見、お料理教室のようですが、固形石鹸を使っての泡遊びです。先輩保育士が固形石鹸をすりおろし、粉状にしてボウルに入れてくれます。そこに水を少しずつ足しながら、泡立て器やホイッパーを使って泡立てていくと、きめの細かいきれいなクリームとなります。まるで生クリームのような感じです。「ちょっと軟らかいかなあ」と混ぜていると、先輩保育士から「もっと石鹸を足してあげよう」と、すりおろした石鹸を加えてもらったり、「硬い」とつぶやくと「水を足してみる?」と助言をもらったりしながら、それぞれがイメージするかたさの泡クリームを作っていました。次に、先輩保育士から「赤・黄・緑の色を使う?」と食紅を出してもらおうと、そこから、表現したい気持ちが一段と高まったようで、色の組み合わせ、分量により、様々な色合いの泡クリームをつくり出していました。そして、それをカップに移すと、益々、イメージが膨らみ、カラフルな色合いの「クリーム入りジュース」「アイスクリーム」作りに発展していました。遊ぶうちに、気持ちも解放されてきた様子で、泡クリームを手塗してみたり、握ってみたりして、感触も楽しんでいました。形が変化する素材で遊ぶことの面白さや素材に触る感触を味わえたようです。きっと、今後の実践に活かしてくれることでしょう。また、「3歳未満

児は、食べてしまうと思うから、幼児でやってみよう」と、実践での遊びの展開を考える発言もあり、保育士としての頼もしい姿を見せてくれた卒業生たちでした。

写真のように、甘くて美味しそうな作品が並びましたが、部屋は甘い匂いではなく、とてもさわやかな石鹸の香りに包まれていました。フレッシュな若手保育士である卒業生を表すようなさわやかな香りでした。



③作って遊ぼう

作って遊ぼうのコーナーは、1回目10名、2回目9名の参加がありました。先輩保育士3名の方がお手伝いに来てくださいました。今年度作って遊んだのは、人気の絵本「だるまさんが」のだるまさんのトコトコ人形。少し早く来た卒業生たちは、目の前にある材料にワクワクし、材料を選び、久しぶりに会えた友達との話にも花が咲いていました。

「だるまさん」は、画用紙とひもとペットボトルのふたで作ります。作り方の説明を聞き、お互いに作り方の確認をしつつ、皆さんだんだん熱中して作り出しました。だるまさんの表情をいろいろ考えたり、「びよ〜ん」と伸びる身体の部分を作るのに友達同士手伝ったり。だるまさんを作成しながら、「未満児さんには、先生が作ったもので、ちょっと遊んであげよう」とか、「5歳児さんは少し作れたりもできるかしら…」と、保育をする際の引き出しが一つ増えたと、自分のクラスの子ども達を思い浮かべ、嬉しそうに話しながら作成してしまし

た。そこへ教員の皆さんも様子を見に来られました。卒業生の皆さんは、懐かしい先生方に会えてうれしそうに、学生時代のこと、今の職場でのお話や社会人になってからのこと、最近の生活のこと等、だるまさんを作りながら話が尽きないようでした。特に、この3月に卒業した卒業生たちは、新任ならではの苦労話を話しつつ、「でも、子どもはかわいいのよね」と、たくましい表情も見せてくれていました。

だるまさんが出来上がると、ひもとペットボトルのふたで作った手足を揺らしたり、縮めた身体を伸ばしてみたりして出来上がっただるまさんに満足した表情。最後は、絵本の読み聞かせに合わせて、動かして楽しみました。皆さんが作成しただるまさんで、園の子ども達の喜ぶ姿が目につくようです。来てくださってありがとうございました。



④体を使って遊ぼう

ベテラン保育士3名の方が講師となって、桜花・名短卒業生に体を使った踊りや体操、遊びを教えてくださいました。はじめは一人ずつ自己紹介をしました。「昨年卒業しました。今は3歳児クラスの担任をしています!」「卒業して3年目です。5歳児クラスを担当しています!」など、勤務年数や担当クラスを順番に話してもらいましたが、照れながらも、仕事に誇りをもって頑張っている様子が一人一人の言葉から感じることができました。

自己紹介が済んだら、早速楽しく体を動かしていききました。この時期、園では七夕会や夏祭りが夏の行事として実施されるため、実際に園で子どもたちと一緒に楽しんだ踊りから紹介し

夏季保育セミナー

ていただきました。はじめは「子どもソーラン節」と「クワガタ音頭」を踊りました。曲がかかると、参加した卒業生から「あ、これ私の園の夏祭りでも踊ったことがある！」と嬉しそうな顔で話す声も聞かれました。

音頭のほかにも「かえるのみどりちゃん」や子どもたちに大人気の「エビカニクス」「かえるの体操」なども楽しく踊りました。「昆虫太極拳」は、曲に合わせてカマキリやダンゴムシ、バッタ、カメムシなどの昆虫のポーズをしますが、曲がスピードアップしたり、ポーズの順番がランダムに出てきたりと、次第に難しくなり、参加していた卒業生のみなさんも必死でポーズを作って、大変盛り上がりました。後半は、「おかしなテープよ」「大工のキツツキさん」などの手遊びや、「おとなこうえん」「バスにのって」など、親子で触れ合える遊びも教えていただき、楽しみました。

今回、講師をしてくださったベテラン保育士さんの中には、小さいお子さんと赤ちゃんを連れてきてくださった方があり、卒業生たちは常にその小さい参加者の表情や動きに興味津々でした。さすが保育者だなあと、温かい気持ちになりました。今回様々な踊りや遊びで、同じゼミだった友達ばかりではなく、初対面の卒業生同士でも触れ合い、同じ保育者として「明日から頑張ろう！」という気持ちをお互いに共有することができ、癒やしの時間をもてたのではないかと思います。



⑤おしゃべりタイム

〈小学校・特別支援学校 前半〉

本学で特別支援学校教諭免許状を取得した1期生にあたる卒業生4名が参加してくれました。4名は現在、特別支援学校、



小学校特別支援学級、小学校通常学級の教育現場で「先生」として活躍してくれています。

子どもたちから教えてもらったこと、先輩の先生方から教えてもらったことなど、学校現場で日々奮闘している様子を生き生きと話してくれました。

本学で学んだことを基盤にして、特別の支援を必要とする子どもたちと関わりながら毎日が勉強の連続であることをキラキラとした目で語る卒業生の姿はとても頼もしく見えました。もちろん大変なこともあるようですが、子どもたちに囲まれながら自分自身が毎日成長を実感できる教師は大変素晴らしい職業であると全員で共有することができました。

特別の支援を必要とする子どもをはじめとして、すべての子どもたちの学びと育ちを支える教師として、これからも活躍してくれることを願っています。

〈小学校・特別支援学校 後半〉

特別支援学校勤務の2人、小学校特別支援学級担任1名、小学校3学年担任1名、名古屋市私立保育園勤務1名の5名でスタートし、最後のほうで保育園勤務の3名が加わって、最終的には8人で語り合う時間となりました。

話題は、支援が必要な子どもと周りの子どもとの関係をどうつくっていくのか、そのために教師・保育士が何をやらなければならないのかということが中心になりました。特に自治体による意識や体制の違いに、話が弾みました。「そっちではそんなことをやっているの!」「その方法を取り入れたい!」と熱心に情報交換をし、現在の自分たちの取り組みの意義や方法を振り返っていました。保育園に勤める卒業生から保幼小接続のあり方について現状や課題が出され、保幼小全てを学んできた者たちだからこそできる建設的な議論になり、桜花の良さを再認識しました。

現状に満足せず、子どもたちのために自分ができることは何かを考える姿に、学生の頃とは違うたくましさを感じ、とても

嬉しくなりました。

私もつつい話に夢中になり、あっという間に30分が過ぎました。皆が「もっと話したい」と思いながらの終了となりました。

〈幼稚園・保育所・認定こども園〉

保育園・幼稚園・こども園等に勤務する1年目・2年目・3年目以上の卒業生（前半8名後半8名）と先輩保育者2名が集まり、教えてもらいたいことを情報交換したり、悩んでいることを話したりアドバイスをもらったりしました。話は尽きなく、あっという間に時間が過ぎていました。

具体的な遊び（水遊びや雨の日の遊び）や、教材の出し方などの質問が出されると、それぞれの経験からアイディアを出し合い、さっそく明日からの保育に活かしていけそうでした。また、保育体制や指導方法（人間関係）の悩みも出され、皆がそれぞれの悩みに共感しながら話をしたり先輩保育者からアドバイスをもらったりしていくうちに、悩みを分かってもらえる人の存在の必要性や、関係づくりのコツなどに気付いていっているようでした。また、3年目以上で主任の立場の卒業生からは、若い保育者の思いを知ることができ、自園で活かしていきたいと話され、1・2年目卒業生からは自分の思いを聞いてもらえたことが嬉しかったとの声があり、それぞれの立場から互

いの思いに気付き心を寄せる機会にもなっていたようです。すぐには解決できない問題もありますが、できる限りの対策をしながら、子どもたちのために元気に頑張っていこうとする卒業生の思いを感じることができました。



セミナー終了後も、他のブースの遊びを体験したり久しぶりの友人と談笑したり、懐かしい先生方に現況を報告したりなどする姿も見られ、交流を深めていました。

参加者の笑顔から、明日からも頑張ろう！という思いで帰ってくれたのではないかと考えています。主催者にとって開催した喜びを噛みしめています。

今後も、卒業した若手保育者がほっとした気持ちで集い、元気に職場で力を発揮し、楽しく子どもたちと過ごせるような機会にしていきたいと考えています。

各ブースの担当教員 ● ①鬼頭弥生（名古屋短期大学保育科） ②吉田真弓（名古屋短期大学保育科）

③Dalrymple 規子（桜花学園大学保育学部国際教養こども学科）

④武藤直子（桜花学園大学保育学部保育学科）

⑤森川拓也 小柳津和博 伊藤茂美（桜花学園大学保育学部保育学科）

参加者 アンケート (抜粋)



- 久しぶりに大学に来て、友達や先生にも会えて嬉しかったです。こういう機会を作っていただけて嬉しいです。
- 懐かしい気持ちになりました。いろいろお話ができて良かったです。
- とても楽しかったです！今日の学びを今後の保育に生かしていきたいです。
- 明日からでも使えるようなものばかりで、参考になりました。また、参加したいと思いました。
- たくさんのことを学べて嬉しかったです。ありがとうございました。
- 楽しく会話しながら身体を動かすことができて良かったです。
- 感触遊びで困っていたので、いろいろ知ることができて良かったです。
- 「だるまさんが」の絵本を昨年の年少クラスの子が大好きだったので、その制作が出来て嬉しかったです。
- 励ますようなことを言ってくださり、少し元気が出ました。
- みんなの話や意見が聞けて励まされました。

冬の講演会(報告)

心の窓を開いて、世界を広げよう

ニュージーランドから学んだ、大人と子どもの共生の輪と多文化理解

幼保連携型認定こども園おかだまのもり 園長 谷島直樹氏

報告者：桜花学園大学保育学部国際教養こども学科 Dalrymple 規子

キーワード：多文化共生、ニュージーランドの保育・教育

2024年度冬の講演会は、今年度の研究所のテーマ「共生社会を担う子どもの育ちのために」にぴったりの方——谷島直樹先生をお招きした。現在、北海道の幼保連携型認定こども園の園長でいらっしゃる谷島直樹先生は、日本とニュージーランドで保育士として勤務、ニュージーランドではさらに小学校でも勤務されてその後、日本のこども園の園長となられたグローバルに活躍されている方である。2022年に保育学文献賞を受賞したニュージーランドでの保育体験をまとめた著書「ニュージーランドの保育園で働いてみた：子ども主体・多文化共生・保育者のウェルビーイング体験記」にも多く語られているが、ニュージーランドは、マオリ民族はじめ、様々な多くの人種がともに生活をしている多文化共生の社会である。今日はその内容も含め、谷島先生が体験されてきたことを丸ごと聞かせて頂けると期待をもって講演会に臨んだ人が多かったことであらう。

始まる前に、谷島先生からは「質問は、slido というアプリでたくさん下さい！」とのことで、皆、気軽に質問ができる仕掛けも嬉しい。

ニュージーランドという国・保育・幼児教育

マオリ民族のことわざから始まった講義。マオリ語は全く分からないのに、その言葉の響きがなぜか懐かしく感じたりもする。

人間は、チンパンジーと98%までは遺伝子が同じであるが、では一体何が違うのか。北海道大学の川田学先生から聞いた話では、1つ目に人間には歴史があるということ。2つ目に技術・文化・文明を次の世代に継承することができるということ。それは、それぞれの地域で継承していついて、それぞれに話している言葉も違い、それも継承していついて。そういった意味で、人間の世界は、多文化・多民族である。

ニュージーランドは、本当に多民族で、ニュージーランドのナショナルカリキュラム（日本でいう保育所保育指針や幼稚園教育要領）であるテ・ファリキにも「130ヶ国の200言語をしゃべっている」人たちが住んでいると記載されている。保育者・先生だけでも80ヶ国——トンガ・ミューベ・イギリス系・ニュージーランド・オーストラリア・ホンコン・オランダ・フィンランド等々の人たちが勤務している国である。先住民はマオリ族で、ラグビーのワールドカップで有名なオールバックスの「ハカ」も、もともとはマオリ族の威嚇の踊り。

ニュージーランドの幼稚園は、3歳～5歳までが通っていて、1クラスには毎日40名が通っている。子どもは毎日通う子、曜日が決まっている子、いろいろである。ニュージーラン

ドの教育制度は、幼児教育から大学までをつなげて考えられていて、大人になってから学びなおす人たちも多い。

テファリキ

このように、多文化共生社会のニュージーランドにおいて、文化がそれぞれ違う中で、どうやって保育をしていくのか。そこでは、テファリキが重要なカギとなっている。まず基本としてのテファリキの子ども観である。子どもは「有能」で「自信に満ちた」学び手であると謳い、だからこそ、社会で大切に育てていく必要があり、社会でその力を発揮できるようにしていくことが大切であると述べている。

テファリキは4つの原則と5つの要素でできていて、それが絡み合って保育をしていくことが大切である。テファリキとは、マオリ語で「編まれた敷物」という意味で、この4本の糸と5本の糸で織られたものをイメージした保育の理念である。

4つの原則の中に、「エンパワメント」があり、そこでのキーワードは“マナ”＝“魂のようなもの”である。それが認識され、大切にされることによって、エンパワメントが高められる。大事なことは、まず最初に自分自身が満たされることである。自分自身が満たされると他者のことをサポートできるような気持ちが生まれるからである。このマナを動かす5つのスイッチが、5つの要素であるウェルビーイング・所属感・貢献・コミュニケーション・探索である。

遊びを通した学びと小学校の学び

ニュージーランドの保育は、プレイベースドカリキュラム（＝子どもを大切に、マナを高めていく）で進められている。そして、保育施設は日本と違い、家っぽく建てられている。ここで、すこし、NZの保育を体験してみよう。自分が保育者になったと思って、次の動画を見てもらいたい。

（動画の様子）金づちで木にくぎを打っている3歳～4歳の子どもがいる。一生懸命打っている。そして、三角の木を外し、また、上につけようとしている。上についたので手をたたく。また、もう一本釘を上から打ち付ける。「イエーイ!!!」と。

この映像を見て、皆さんはどのようなことを感じているか。同じものを見ているけれど、「ケガしない?」と思う人、「保護者には大丈夫か?」と思う人、「面白そう」と思う人等々。色々感じるかと思う。大切なのは、子ども個々人が持っているものは何かを考えながら、子どもの様子を見、考えることである。

子ども達は、このように遊びを通して、多くのことを学んでいる。子ども達は自由に遊んでいるが、決して放任ではなく、保育者たちは、「昨日はこれをやったよね。じゃあ、今日はどんなものを置いてみようか」など、一人ひとりを大切にしている。

私は小学校のYear1（1年生）のクラスにも勤めた。校庭は天然芝生。リーディング授業は5歳半くらいからある。チームリーディングをしたり、算数の時間の答えの出し方を相談したり、例えば、算数では、正方形と長方形はなぜ仲間？という問題をみんなで考えたりする。“モダンラーニングエンバイロメント（現代学習環境）”として、1年生は60人を20人の3つに分け、その子のレベルに合わせて、科目ごとに授業をする、という形をとっている。保育の現場では、この子どものこういったところが困った…と「欠乏モデル」で子どもを見がちであるが、ニュージーランドでは保育現場も小学校も、子ども達に注がれるまなざしは、「信頼モデル」である。

ニュージーランドの移民の歴史と今

ニュージーランドは下記のように長い移民の歴史がある。

1100年頃にマオリ族がニュージーランドに定住

1769年頃にイギリスの移民が急増

1840年：ワイタング条約が締結

マオリ族は土地とのつながりを大切にしている、そのことを保障するために条約を締結したわけだが、マオリ語への翻訳が英語に忠実ではなく、イギリス側は、この条約をニュージーランドの植民地化、マオリ族は保護条約とそれぞれが違った形で認識していた。

1960年頃：労働力としての南太平洋諸国移民急増

それぞれの文化や価値観の違いから、仕事なども経営側が期待するもの（働いてもらいたい）と働く側の価値観（その時の気持ちでーその場しのぎで）とが違うという問題が起こる。

1970年頃：多様な移民の受け入れによるアジア系移民急増

この頃には、マオリ語が話せる人が減ってきた。そのために下記のような運動がおこる。

1980年：マオリ・ルネサンス運動（マオリ文化復興運動）

1996年：テファリキができる

この、歴史を見てわかるように、ニュージーランド＝移民の歴史ということも言えよう。そこで、国としても対応が必要ということで移民に対しての、①社会支援プログラム や ②相談センター ③英語教室 など、が行われた。

例えば、ジェシカさんによると、難民支援プログラムは、6週間まずはいることが必要で、その後、地域に入り、そこでの



無料の支援プログラムを受ける。その中には、例えば生計を立てるためのパンを作るということがあるが、まずは英語でそもそもどうやって言うのか、ということを知っていく。子ども達は保育園に入るようにする。補助金をもらう。また、ATMからの出金の仕方も教えてくれるのもこの支援プログラムの一つである。

教育現場でも、多文化への取り組みがされている。カリキュラムでは多文化理解を強調していて、2023年からは、歴史の必須授業になっている。主に南太平洋諸国を対象としたラングエッジウィークがあり、例えば、トンガラングエッジウィークの様子を見てみよう。（映像）また、例えば、南太平洋諸国の一つニウエの「ニウエ言語週間」があったときには、保育現場では、ニウエに関連した遊びを行った。紙粘土を使った遊びや、ココナッツを削って、ココナッツブレッドを作ったりした。そのような形でこの週を皆でお祝いするのである。ちなみに、10月末にあるハロウィーンには、発祥の地であるアメリカの先生がやってくれた。

多文化共生について考える

令和5年現在における在留外国人数は、341万992人。日本における保育現場に通う外国につながる子どもも多くなってきている。そのため、多文化共生について考えていくことは非常に重要である。

共生を知るためには、まず、自分を知ることが大切である。自分自身のウェルビーイングを知り、自分自身の所属感を体験することである。

また、自分が持つ文化背景、つまり、自分の文化、言語や思考のパターン等は、自分で選択したものではなく「植え付けられた」ものであって、使用する言語によって思考や認知が変わる、という視点も大切である。例えば、感謝（ありがとう）という言葉も、英語圏では、すべてがThank you だけれど、日本では、ありがとう、まいど、おおきに……など、多くのバリエーションがある。

スウェーデンの教育においては、「社会的および文化的な集会の場（Meeting Place）」という概念がある。それは、異なる背景や文化に触れることで、他者の立場や価値観を理解し、共感する力の基礎を身に着けることができる場所（機会）のことである。性別や民族的出身など、それぞれ違いがあるという

冬の講演会

こと、つまり、「みんなそれぞれ違いがあるので、お互いのことを知って学ぶ」を前提にカリキュラムを考えている。

前述したニュージーランドのテファリキでも、保育者は「それぞれの背景を持つすべての子ども達が、自らのアイデンティティや言語、文化において、強く成長できるよう支援する」ようにと強調している。それは、「教育の場で子ども達の家庭の言語や文化が尊重され、保育者が彼らの文化的な知識や存在のあり方に応じた対応することで、学ぶものとしてのアイデンティティが強化される」からである。子ども達が、家で使う言葉を園でも使う機会を作るとはよくやっていたが、そのようなことを体験すると安心する姿を多く見てきている。

言語の発達と社会的地位

ここで、カミングズ（1979）の2言語（バイリンガル）の到達度による分類を見てみたい。この資料では、一輪車や自転車、言語を分かり易く表している。

モノリンガル：1つの車輪（言語）があれば困らない。1つの車輪でも進める。

ドミナント・バイリンガル：2つのうちどちらかの言語のみ年齢相応レベルに適度に発達している。大きい車輪と小さな車輪があれば、1つの車輪よりは遠くに行ける。

バランス・バイリンガル：2つの言語が年齢相応レベルに適度に発達している。2つの車輪のバランスがとれていて、タイヤが良く膨らんでいれば、もっと遠くまで行ける。

ダブルリミテッド・バイリンガル：どちらの言語も年齢相応レベルに達していない。2つの車輪があっても空気が抜けていると、どこへも行けない。

例えば、母国語も5歳、認知も5歳、英語は2歳という子どもがいるかもしれない。その時に大切なことは、子どもにとって何が大事かを考えることであろう。私は、まずは自分の言語が何か…をその子自身が感じる事が大事なのでは、と思う。

一方、社会的地位が劣勢である言葉を母語とする子どもは、

せっかく2言語にふれて育つ環境にありながら、結果として1つの言葉しかできないモノリンガルになってしまう傾向が強

い（中島、2016）ということもある。例えば、両親は、日本語で話すのに、子どもは英語しか話さない、という事例もあつたりする。

インクルーシブの社会に向けて

インクルーシブカリキュラムを阻む3つの障壁がある。それらは、気づかずに起きていることが多い。1つ目は、建物や道、トイレなど特定の人しかできない構造になっている物理的障壁。2つ目は、誰かに何かを強要するようなアプローチや環境になっている社会的障壁。3つ目は、何歳だからできて当然あるいはできなくて当然といった思い込みである概念的障壁。

文化的な部分も、当たり前と思っていたことが他の文化では、違った意味になるものが多い。例えば、クリスマスパーティーも、特定の文化の人は参加できない、ということがあり、エンドオブザイヤー・パーティーと名前を変えてみんなで楽しんだりということがあった。また、私たち日本人がよく子どもにやる、偉いね、と頭を触ることは、南太平洋ではよくないことだったりする。そういったことは、あまりにも当たり前で自分自身で気づかないことが多い。だからこそ、自分の中で無意識に持っているものであることに気づくことが大切である。

また、相手を知るといことも非常に大切である。その際、異文化理解を助ける考え方に、アイスバーグ（冰山）モデルというモノがある。表面に出ている「認識している要素」は氷山の大部分を占める「認識しにくい要素」に支えられているという考え方である。目の前にいる人の服装や言葉、好きな食べ物などは見えている部分だが、その人がなぜそのようにしているのか、については、例えば、生まれてきた国、育ったのは水が豊かな、あるいは水不足の地域、また、経済的にどうだったか、家族の思考パターン等、8割くらいの認識できない要素の方が多い。

そこでは、お互いが誤解してしまうこともある。それは、願いや集団の秩序に隔たりがある時に意識として生じるものだと思う。自分のあたりまえをわきにおいて、相手の文化、見え方、感じ方、理解の仕方、問上げ方を知ろうとすると行動の背景になる理由が見えてくる。

そして、誰も皆思っていることは、「大切にされたい！」ということである。難しいけど、みんなで考えよう。女性の時代に子どもを産んで、男性になって…と言う人もいる。健康的な人、いろいろなものを持っている人。それいいよね、という人も、それは違うと思う、という人もいる。その人たちも排除することなく、やっていく方法を考えていきたい。



質疑応答

Q おかだまのもりでは、ニュージーランドの保育を取り入れているか？ その場合、どのように取り入れているか？

A ラーニング・ストーリー（テファリキから）を取り入れた。チェックリストではない。考え方を変えていった。

Q (NZ) 学校では、担任1人で何人の子ども達を見るのか。

A 1人につき18人とサポートティーチャー。

Q 最近海外の人たちが日本に増えてきた。コミュニケーションは難しい？

A その国の言葉であいさつする。また、文字で書くようにしている。Google 翻訳を使ったりもする。わからないまま、分かりましたにならないように気を付けている。

Q 小学校の授業のレベル分けは、どのようにしているのか。

A 先生が分ける。一つ一つ子どもが取り組んでいることを、表を見ながら。その子に合ったレベルになるように見ていく。

Q 「自分を知る」ために、どんなふうに保育に取り入れるのか。

A その地域のお祭りをやったりする。保護者に来てもらう日を決める。例えば、フランス人だったら、フランスのお祭りは何ですか、と聞いたり、フランスの料理を作ってもらったりした。子ども達は、「自分のお母さんが作るのは本当に美味しいんだよ」と嬉しそうに言う。その他には、ランゲージウィークがある。挨拶の言葉もいい。それから、数の数え方。英語を話している場所でも自分の言語も大切にされている、と思えることがいい。

Q 日本は、不登校の子どもが増えているが、ニュージーランドはどうか。

A ニュージーランドも増えてきている。理由は、学校に適應するのが難しい。数学の授業で、10歳くらいの子どもが言っていた言葉がある——「私がこの学校に来るときには、頭をホワイトにしないと大変疲れる。私の頭はブラウンだ。成功できない」。私たちは、教育を「あなたたちのためにしている」と言っているが、本当にあなたたちのためなのか。この言葉のように、劣等感を感じている子ども達がいることもわかっておく必要がある。

Q ニュージーランドの子ども達がどのように成長しているか

A 自分の強みを大切にしているのではないかなと思う。それを周りもそのように見ている感じ。急に絵を描いたり、急に踊ったり。それを自分も大切に、誇りに思っている。高校では、テストの点数。そこでドロップアウトする子もいるかもしれない。乳幼児期は、基礎。いろんな大人に祝福されて、自分を

愛することにつながる。違うという前提で大切にしていこう。ニュージーランドを歩くと、居心地がいい。ニュージーランドで、日本人だからって差別されたという体験はない。

当日の参加者は、106名で、アンケート回答者は、68名であった。4件法でアンケートをお願いした結果——大変良かった（40人）とよかった（24人）——からも、大変好評であったことが示された。

参加者の感想から5件抜粋

- 多文化、色々な考え方を大切にしながら共存できるように、外国籍の子も安心して保育園で過ごせるようにしていきたいと思いました。



- ニュージーランドではトンガの歴史を学んだりすることを聞いて、多様性を受け入れることや共生することには、まずは自分、自国を知ることが第一歩だと思いました。
- 現場で実践できる事、子どもたちの本当の想いを引き出せる保育をしていきたいと思いました。
- 日本の保育とは違った良さと、これから多国籍家庭が増えていくであろう日本の社会における保育で、必要になることを学ぶことができました。
- 目に見えず、確認しにくい事だからこそ、経験豊富な先生の体験の中からの学びができて良かったです。



ニュージーランドで保育者として4年、小学校教諭として1年勤務されていたその豊富な体験から、生き生きとした子どもの姿、一人ひとりの子ども達が大切にされている様子が具体的に伝わってきた。私たちも、気づかないところで知らないうちに壁を作っているかもしれない。いつも、自分を振り返り、相手の氷山の見えない部分に思いを馳せつつ、国・文化・言葉等、多種多様な違いがある子ども達が自分らしく自信をもって過ごせるようにと、思いを新たにしたい講演会であった。

子育て支援室「さくらんぼ」利用者へのアンケート



子育て支援室には対象年齢を決めた交流会と、どの年齢の子も参加できる開放日があります。子育て支援室に来てくださった保護者の方にお子さんの様子や利用された感想などをお伺いしました。ご協力くださいました保護者の皆様、ありがとうございました。

Q 支援室に来るきっかけは何ですか？

- 上の子が通っていて楽しかったの。
- 友人の紹介
- 豊明市の広報やチラシ、HP を見て。
- 桜花大学の卒業生で誘い合ってきました。
- 名桜祭で先生に教えていただきました。
- 家の中だけだとマンネリ化してしまうため。
- 自宅から近い支援室を市から教えていただいた。
- はじめは「さくらもち」を教えていただき、「さくらもち」から「さくらんぼ」を教えていただいた。



Q お子さんは日頃どのような遊びをしていますか？

- ごっこ遊び 粘土あそび はさみを使う 外遊び
- すべり台 ブランコ 車 電車 ボール遊び
- 走り回ること ブロック 人形 おままごと
- ストライダー カタカナを書く
- 絵本 シール カード 音の鳴るおもちゃ
- つみ木 家で YouTube を視聴
- 兄弟で遊んだり、外を歩いたりすることが好き。

Q 支援室の良さはどんなところですか？

- 小規模で保育士さんとの距離が近いところです。
- 部屋が広すぎないので、色々なお母さんとお話ができて、ウッドデッキで思い切り体を動かせる場所。
- 子ども同士で遊ぶことができ、良い刺激になる。
- 先生方や他のママと気軽にしゃべりや育児の相談ができて気分転換になる。
- 同じくらいの子と遊べ、触れ合い遊びなどをしてくれるところ。
- 家にはない色々なおもちゃなどで遊べたり、他のお友達と関わるところ。のんびり遊べる場所。



- 先生たちが多く、きれいで広いところ。
- 室内でたくさん遊べる場所。
- 先生方も一緒に遊んでくれるところ。
- 経験豊富な保育士さんとも遊んでもらえるところ。



Q 支援室をきっかけに保護者の方同士つながりはできましたか？

- 仲良しの方ができました。幼稚園の園庭開放でも話をしたりしています。
- 幼稚園入園前に、顔見知りのママがたくさんできました！
- 同い年のママ達にも子育ての相談や悩みを共有できて嬉しい！
- 同じ月齢の方に話を聞いて子育ての参考になっている。

Q 支援室を利用された感想は？

- 学生さんとの関わりもあり、色々な人と関われるのが良いです。
- 毎月親子共々楽しく過ごさせてもらっています。先生方が親切で、温かく見守ってください、リフレッシュできます。
- いつもありがとうございます。母子共に遊びに来る日を楽しみにしています。これからもよろしくお願いします！
- 保育士の方たちにいろんな相談ができて良い刺激と息抜きになりました。
- 子どものことをよく覚えていて接して頂きありがたいです。
- 安心して遊ばせることができありがたいです。
- 上の子の時から来ているが、遊ばせやすく行きやすい。親身になって相談に乗ってくれ本当に助かっています。
- 交流会など楽しめる企画がいろいろあってよかった。我が子の言葉がだいたい増えたように感じます。
- 同年齢、異年齢の子と関わることができ、人間関係を学べる良い機会となりました。



- 先生達がよく見ていてくれるので助かります。
- 授乳できる場所を確保してもらえて安心。
- 毎月楽しみにしています！
- 私も元気をいただきました！

Q 学生との交流はいかがでしたか？

- 普段お姉さん達と関わる機会がないので、刺激があって楽しいです。たくさん遊んでもらえてよかった。
- 手遊びや、絵本を読んでもくれたり優しい声かけをしてくれて子どももニコニコでした。
- いつも新鮮な遊び方をしてくれるので子どもも嬉しそうです。
- 皆明るくて、子どもたちにも優しくかったです。
- 学生さんが手遊びや体操を学んでいてすごいと思う。
- 一生懸命な姿が印象的でした。
- 学生さんは緊張されている様子でしたが、学びを活かせる良い場だと思います。

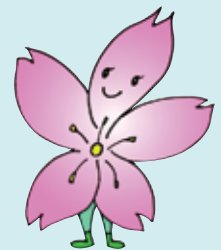


- 子どもが人見知りでなかなか一緒に遊ばなくて申し訳なかったです……。



昨年度に引き続き、今年度も多くの皆様にご利用頂くことができました。子育て支援室「さくらんぼ」が、お子様にとっては伸び伸びと遊べる場、そして保護者の方にとってはホッと一息つける憩いの場となっていることがアンケートからうかがうことができました。「さくらんぼ」が子育て中の皆様にとって今後も益々育児の交流ができる場であり、気軽に立ち寄って頂ける場であり続けたいと思います。

(文責 吉田真弓)



2024年度 子育て交流会、支援室開放日参加者数

2025/3/7現在

	交流会／回	子ども	大人	開放日／回	子ども	大人
4月	10	64	51	6	70	59
5月	13	80	66	8	83	78
6月	12	84	69	7	88	77
7月	6	40	33	4	47	43
9月	12	86	79	7	68	68
10月	13	83	79	8	82	80
11月	12	68	64	6	74	68
12月	6	51	45	4	47	41
1月	11	85	76	7	62	54
2月	10	80	72	7	80	70
3月	3	31	26	2	24	22
計	108	752	660	66	725	660



大学における子育て支援室の役割

鬼頭弥生（名古屋短期大学保育科） 武藤直子（桜花学園大学保育学部保育学科）
キーワード：子育て支援、地域交流、保育者養成

キャンパスにおける子育て支援室の役割

キャンパス内にある子育て支援室「さくらんぼ」（以下、支援室という）では、年間を通して多くの親子の利用があります。支援室には、常に保育士が在中しているため、単にここにきて遊ぶだけではなく、保育士との話を楽しんだり、お母さん同士で子育ての情報交換をしたり、大人も子どもも楽しく過ごすことができる場となっています。また、本学の学生はこの支援室において、子育て支援を体験的に学ぶ機会を得ています。今年度も引き続き名古屋短期大学1年生はゼミごとに1回交流会に参加し、桜花学園大学保育学部保育学科及び国際子ども学科の学生もゼミで参加しています（表1参照）。

ほんの短い時間ではありますが、学生にとっては、子どもだけではなく、保護者の方とも関わることに大きな意味のある経験となります。保育現場では、保護者支援も重要な役割を占めていることから、学生にとっても実習以外で直接、子どもや保護者とのかかわることができる支援室の役割は大きいと言えます。

学生による交流会の親子の姿から

今年度も、多くの親子に交流会に参加していただきました。去年に引き続き参加して下さっている親子もたくさんいます。そのため、学生が参加する交流会を楽しみにしてくれているようです。ゼミごとの交流会では、元気いっぱいやさしい声の学生に子どもも惹きつけられ、子どもの目がキラキラと輝いて

見えます。子どもは、学生の姿を真似てみたり、じっと見たり、その様子を横で微笑ましく見守る保護者も穏やかな表情です。中には緊張している学生もいますが、そのような学生にも保護者は温かいまなざしで見守ってくれています。学生の交流会は学生にとっても、親子にとっても有意義な時間となっていると言えます。

交流会の準備

交流会の参加はゼミ単位で行い、学生の代表者が事前の打ち合わせを行います。きちんと挨拶をして計画書を提出



します。交流会に向けて内容を決め、事前に大型絵本を借りてきて練習したり、お面を作ったりしています。また、体操の曲をいくつかピックアップして練習したうえで、参加する日の対象年齢に合わせてセレクトしています。ゼミ内で3～4のグループに分かれ、手遊びや体操、絵本の読み聞かせなどを披露します。入学して間もない1年生も子どもたちとの関わりを楽しめるものになるようにアイデアを凝らしていました。

交流会を通して学生に期待すること

子どもたちは、普段、見慣れないたくさんの学生を前にはじめはびっくりしている様子も見られますが、お互いに緊張しているものの、学生の元気な声が会をリードしてくれ、子どもたちも集中して参加していました。手遊びや親子ふれあい遊び、

表1 2024年度 さくらんぼ支援室交流会等実施状況

日時	ゼミ名	参加人数	内 容	日時	ゼミ名	参加人数	内 容
5月29日	上原ゼミ	12	風船色分けゲーム	6月13日	武藤ゼミ	12	手遊び・絵本・ふれあい遊び
6月12日	轟田ゼミ	12	手遊び・絵本・リズム	7月11日	武藤ゼミ	13	手遊び・絵本・ダンス
6月19日	小柳ゼミ	12	手遊び・新聞遊び	10月31日	松永ゼミ	14	手遊び・ふれあい遊び
6月26日	近藤ゼミ	13	手遊び・ガラガラ遊び	11月7日	上村ゼミ	8	体操・ダンス・ふれあい遊び
7月3日	小川ゼミ	12	親子遊び・水遊び	11月14日	嶋守ゼミ	5	大型絵本・ふれあい遊び
7月10日	杉山ゼミ	12	親子遊び・マラカス遊び・感覚遊び	11月21日	嶋守ゼミ	4	大型絵本・手遊び
10月30日	山下ゼミ	12	親子遊び・手遊び	11月28日	嶋守ゼミ	5	大型絵本・手遊び
11月6日	鬼頭ゼミ	13	手遊び・大型絵本・体操	12月5日	堀ゼミ	7	手遊び・ふれあい遊び
11月13日	太田ゼミ	12	手遊び・大型絵本	12月12日	堀ゼミ	7	クイズ・手遊び・ふれあい遊び
11月20日	八幡ゼミ	11	親子遊び・大型絵本・手遊び・体操	1月8日	小原ゼミ	6	親子遊び・カーテンくぐり
11月27日	吉田ゼミ	13	手遊び・絵本・ボール遊び				
12月11日	平野ゼミ	12	親子遊び・絵本				

ゲーム、絵本、体操等、子どもたちの年齢や発達を考え、計画し、3～4人のグループごとに役割を分担しています。支援室のスタッフの援助はほとんど必要なく、学生たちで進めています。交流会後の学生の様子は、支援室に入ってきた時とは違い、その表情から充実感が感じられます。学生には、上手にやろうということより、まずは、自分自身が楽しんで参加することが一番大切であることを伝え、支援室での経験が、今後の保育活動の一助になることを期待します。

学生の感想から



子育て交流会に参加してどのような経験をする事ができましたか？

- ＊満3歳の子どもと保護者がどのように過ごしているのかが分かり、どのように関わっていくと良いのかを経験することができました。
- ＊子どもたちがどうしたら楽しめるのかを仲間と考えることで、計画、練習、実践という段階を体験することができました。
- ＊はじめて1歳児と関わり、どのような言葉がけをすれば良いのか迷い、とにかく笑顔を決めようという意識しました。意思疎通は難しかったけれど、笑顔で関わったことで、子どもたちが楽しそうに一緒にやってくれたと感じることができました。
- ＊動物体操を行いましたが、テンポを速くしてしまったので、もう少しテンポを遅くし、子どもに合った速さで体操を行うことが大切だと学びました。
- ＊1歳児の興味の移り変わりの様子を見ることができました。また、保護者との関わりを持つことができ、貴重な体験ができました。
- ＊子どもたちの発達に合った遊びや絵本を選び、活動を考えるという経験ができて良かったです。
- ＊子どもを楽しませるだけでなく、自分自身も明るく楽しみながら行うことが大切だということも学びました。
- ＊実践後、保護者の方と話す時間があり、子どもとの関わりや保育士についてなど、たくさんのことを聴くことができました。
- ＊遊びと遊びの間をつなぐことが難しかったです。子どもたちが次は何か、と思えるような声掛けができるようになりたいと思いました。
- ＊遊びに入る前の声掛けと、準備の大切さを学びました（準備

の足りなさを痛感）。

- ＊みんなとの掛け合いや子どもと目をあわせて遊ぶことの大切さを実感しました。また、絵本の読み聞かせでは声の強弱、声の出し方を工夫することで子どもたちも楽しみやすくなることが分かりました。
- ＊子どもたちは全員が集中して参加してくれるとは限らないので子どもたちの興味をひくことが大切だと思いました。実際、声掛けや対応が上手くできず、あたふたしてしまったが、保育士や保護者の方が子どもたちの集中が途切れないように声掛けして下さっているのを見て、対応の仕方や声掛けの仕方を知ることができました。
- ＊最初からたくさん反応してくれる子もいれば、なかなか仲良くなれない子もいて難しかったです。



子育て支援室における交流会の意義

学生のアンケートから、交流会に参加することで得られる子どもへの関わり方の気づきや今後の自身の学びへの意欲、さらには保育職へのやりがいを感じていることが分かります。交流会は、時間的には20～30分ほどですが、実際に低年齢児に触れたことのない学生にとって、子どもの様子から子どもの発達に気づいたり、関わり方を学んだりすることができます。また、支援室の保育士の関わり方や声掛けを実際に見ることでの学びや保護者と子どもの関わりを知る機会として有効な機会となっています。

今後も子育て支援室での交流会を通して、まさに共主体として学生、来室する親子そして、そこにいる保育士にとって豊かな経験となる機会と捉え、活動していきたいと考えます。

豊明市子育て支援センターたけのこ交流会への学生参加

豊明市と桜花学園大学・名古屋短期大学は2022年に包括協

定を結びました。それに伴い、豊明市子育て支援センターたけのこの交流が実施されるようになり、2024年には2回19名の学生が交流会に参加しました。前記の支援室は大学内の施設ですが、豊明市子育て支援センターたけのこは豊明市が実施する子育て支援事業です。交流会への参加を通して学生は、地方自治体が行う子育て支援について実践的に学ぶことができました。

表 2

日時	ゼミ名	参加人数	内 容
6月19日	武藤ゼミ	10	わらべうた遊び、ふれあい遊び、パネルシアター、新聞紙遊び、のりものごっこ、体操
10月16日	上村ゼミ	9	手袋シアター、ふれあい遊び、大型絵本読み聞かせ、新聞紙遊び(ハンドル作り、輪投げ)

交流会を通して学生に期待すること

豊明市子育て支援センターたけのこよりご提案いただいた内容（・ふれあい遊び、簡単な遊戯や体操、手遊びなど親子が一緒に遊べるもの、・ペープサートなど親子が一緒に見て楽しめるもの、・授業で学んだことの紹介など保護者が知識や情報を得られるもの）をもとに、交流会当日に向けて、ゼミごとで準備を進めました。10組の1歳児親子のみなさんに充実したひと時をすごしていただき、子育て支援の一助となることをねらいとしての取り組みです。立案する際には、1歳児親子の姿、そして、交流会ではじめて出会う人をイメージすることの難しさを感じていたようです。準備と実践を通して、地域子育て支援の専門性についての学びが深まっていくことを期待するものです。

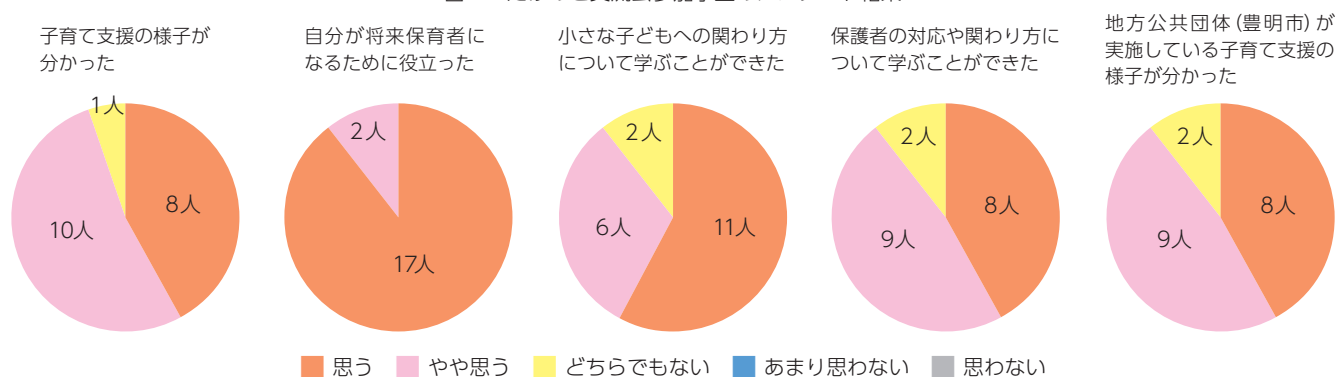
学生の感想から

- ＊子どもも保護者の方も笑顔で楽しく遊びに参加している様子を見ることができ、やりがいを感じました。
- ＊子どもと保護者が共に遊び参加している姿を見て、触れ合い遊びの楽しさや大切さを改めて認識することができました。
- ＊保護者との関わりはなかなか経験できないため、子どもを含めて保護者とコミュニケーションをとれたことは貴重な経験でした。
- ＊保育園や幼稚園ではあまり見ることでできない親子の関わりをみることができました。
- ＊保護者と子どもの関係性を自分の目で見て、それぞれの親子のよさを実感しました。保護者同士で子どもの様子について伝え合う場面も見られて、このような地域の子育て交流会に参加することで、これからの保育に生かせると思いました。
- ＊保護者も含めた活動を展開することで、子育ての中の楽しみの場を設けることの大切さについて考えることができました。

たけのこにおける交流会の意義

学生の感想やアンケート結果（図1）から、交流会への参加を通して、乳幼児の理解や保護者への対応や関わり方に加えて、地域子育て支援の意義や実態についての学ぶことができた実感していることがうかがえます。また、センターの職員の方からアドバイスをいただき、保育実践を学ぶ機会にもなりました。学生にとって、地域の自治体が行う子育て支援に参加する意義は大きいと考えます。

図 1 たけのこ交流会参加学生のアンケート結果

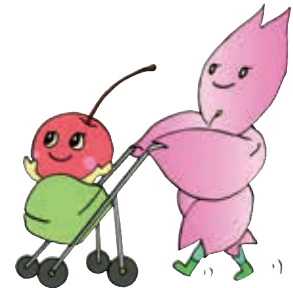


2025年度事業計画

チャイルドエデュケア研究所では、2025年度も前年度に引き続き「共生社会を担う子どもの育ちのために」をテーマに、地域の保育者や子育て家庭、学生、卒業生と共に学ぶセミナーや講演会等を開催します。本研究所では、学生や保育者の学びの場であるとともに、子育て支援室「さくらんぼ」を通じて地域の子育て世帯の保護者が気軽に来てホッとできる憩いの場、交流の場であり続けられるよう、活動を実施していきたいと思います。

夏季保育 セミナー

- テーマ：「遊びを一緒に楽しもう！
——明日から使える保育実践」
- 日 時：2025年7月6日(日) 13:30～15:00
- 場 所：桜花学園大学・名古屋短期大学



冬の講演会

- 講 演：柏倉秀克氏(桜花学園大学副学長、保育学部保育学科教授)
- 演 題：「共生社会を担う子どもの育ちのために」
- シンポジウム：「医療的ケア児に関わる様々な職種間の連携について」
話題提供者：2名
- 日 時：2025年12月21日(日) 13:30～15:30
- 場 所：桜花学園大学・名古屋短期大学
8号館 さくら講堂

編 集 後 記

「チャイルドエデュケア研究所年報」第22号をここにお届けします。このところ、一時のことを思うとコロナも随分落ち着き、夏季保育セミナー、冬の講演会とも多くの方々にご参加いただくことができました。また、支援室「さくらんぼ」も大変多くの保護者の方にご利用いただき、コロナ前の日常を取り戻しつつあることを実感しています。

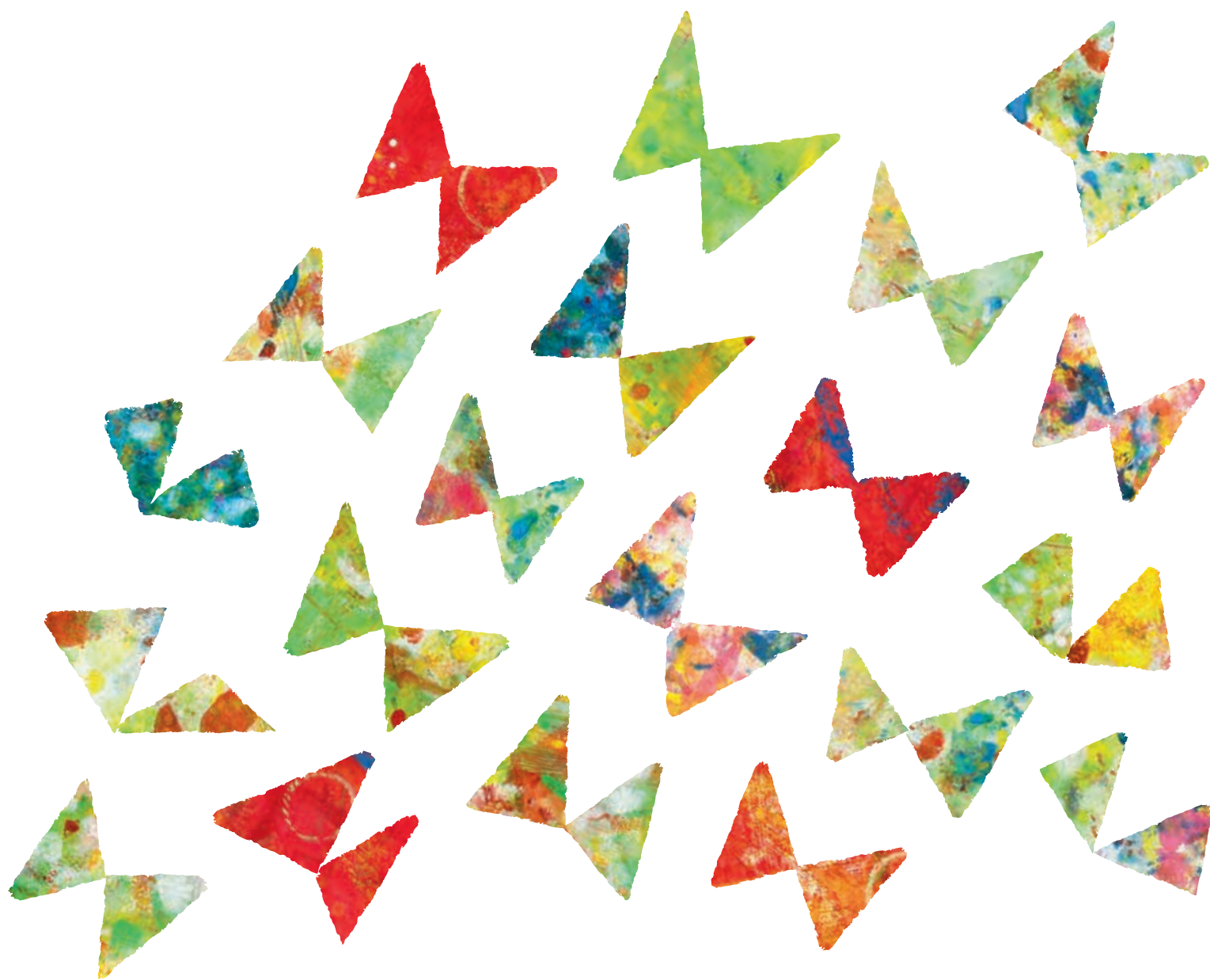
一方、今年度は異常気象に見舞われ、厳しい暑さが長引きました。予測もつかない様々な状況が起こる中でも、学生や保育者の学びを保障したり、子育て家庭の保護者の育児に寄り添ったりする等、本研究所はその時々に応じて対策を講じ、しっかりと役割を果たせるよう、地域のみなさまと共に保育・教育・子育てについて連携していきたいと思います。

【2024年度 研究所役員体制】

●所 長	武藤直子	●主任研究員	伊藤茂美
●副 所 長	鬼頭弥生		Dalrymple 規子
●事務局員	佐藤多美江		吉田真弓
	廣瀬俊治		

表 紙 デ ザ イ ン

桜花学園大学保育学部国際教養こども学科4年授業作品



チャイルドエデュケア
研究所

年報

22号

2024

発行

桜花学園大学・名古屋短期大学

〒470-1193 愛知県豊明市栄町武侍48

名古屋短期大学 TEL.0562-97-1306 FAX.0562-98-1162

桜花学園大学 TEL.0562-97-5503 FAX.0562-98-1162

2025年3月31日発行